

紹介

カール・B・ターナー

「ソヴェートにおけるケインズ批判の変遷」(一)

Carl B. Turner, An analysis of Soviet views on John Maynard Keynes.
Durham, North Carolina: Duke University Press, 1969. Pp. vii+183.

小野進

本書は、アメリカのノース・カロライナ州立大学 (North Carolina State University) の経済学准教授 (Associate professor of Economics) カール・B・ターナー (Carl B. Turner) 氏による J・M・ケインズに対するソヴェートの評価の変遷についての研究である。ターナー准教授はソヴェート側の豊富な資料を駆使しながら、一九一七年のソヴェート同盟の成立からニキタ・S・フルシチョフ氏の退陣 (一九六四年十月) にいたる時期のソヴェートにおけるケインズ評価の推移を克明に追究しており、この書物の近代経済学的性格を念頭においても、私にとってはまことに興味と関心をさそう文献である。われ

われは、この本から、反面からの問題提起として多くの事柄を学ぶことができる。いくらかの重要な基本的な論点だけをあげるならば、第一に、一九一七年からフルシチョフ時代にいたる時期におけるブルジョア政治経済学批判としてのケインズ評価をめぐる国際的レベルでの問題点、第二に、第一の問題と関連して、当該期間における、ソヴェートの社会主義建設にかかわる問題点⁽¹⁾、そして、第三に、このことと密接に關係する全体的世界観としての Marxismus (社会主義学説⁽²⁾、経済学) の理解の仕方をめぐる問題点等々である。

本書を一読してはつきりすることは、一九五六年のソヴェ

ート共産党第二〇回大会を画期として、ソヴェートにおいてケインズ批判がかなり変化の徴候を示してきたということである。この点について、ターナー准教授自身がつぎのように當を得たことをいっている。⁽³⁾「平和共存 (peaceful coexistence) のフルシチョフ時代はケインズ主義のソヴェートにおける取りあつかいに変化をもたらした。最初はゆっくりとしかも着実に批判はより厳格 (rigid) でなくなり、そしてこの時期 (フルシチョフ時代—引用者) の終りになると、スターリン時代のそれと比較すると、批判はごまかし (sophisticated) とみなしうることができる」(本書、一六一ページ)。もしこうだとすれば、ソヴェートにおけるケインズ批判の変遷の研究は、ソヴェートにおける各時期の政治路線と社会主義建設のあり方との関係で考察されなければならない。

さて、本書の構成はつぎのとおりである。

第一章、序論；ソヴェートにおけるケインズ批判の背景

第二章、『一般理論』以前のケインズに対する初期のソヴェートの見解

第三章 ケインズに対するソヴェートの立場(一九三六—

一九四八年)

カール・B・ターナー『ソヴェートにおけるケインズ批判の変遷』(一)(小野)

第四章 『雇用・利子・および貨幣の一般理論』のロシア

語訳

第五章 ケインズと冷戦

第六章 ケインズ主義インターナショナル (The Keynesian International)

第七章 ケインズとフルシチョフ時代

第八章 結論

(参考書目と索引つき)

以上のような構成をもつ本書の研究目的は、この目次から推測されうるように、「ジョン・メイナード・ケインズに対するソヴェートの批評の展開を詳細に分析することである」(七ページ)。そして、ターナー准教授は、自分の研究の意義について述べているが、そのさいに考慮すべき二つの事柄について言及している。すなわち、第一に、ブルジョア政治経済学 (bourgeois political economy) に対するソヴェートの批判の発展についての一般的理解とブルジョア政治経済学批判における幾人かの指導的な批評家の、欧米 (the West) に対する個人の立場をあきらかにすること、第二に、両体制間の経済競争 (economic struggle between the two systems) は、経済学

四七 (三二九)

上、実際の側面のみならず、理論的側面を含むもので、「われわれの体制に反対する、相手(Adversaries)の状態」を研究することは、ブルジョア政治経済学の批判に対応する最良の方策になる、ということである。ターナー准教授の、以上のような自己の研究の目的、意義の言明によって、本書の性格と一定の立場をわれわれは知ることができなければならない、しかしこのような明確なる研究目的と意義そして立場が中途半端でなくて鮮明であればあるほど反面からするどい問題をわれわれに提起してくれる。

さて、もし、レーニン時代、スターリン時代、そして、フルシチョフ時代というような時期区分することが許されるなら、ソヴェートにおけるそれぞれの時期のケインズ批判の典型的な諸特徴、ことに、フルシチョフ時代とフルシチョフ以前の時代において、ケインズ批判がどのように変化してきたかに着目しながら、詳細に、私見をあまりまじえず紹介していきたい。

(一) ソヴェートの社会主義建設の実践を理論化しようとした試みとして、スターリンの『ソ同盟における社会主義の経済的諸問題』がある。毛沢東は、中国の社会主義建設の実践とその総括をふまえて、スターリンのこの本を慎重に注意深く研

究し、スターリンの社会主義経済理論の消極的側面(Ⅱ否定的側面)を批判的に撰取し、『十大関係論』や『人民内部の矛盾を正しく処理する問題について』やその他で社会主義の経済的諸問題を明確にしている。とくに、スターリン論文の欠陥については、「スターリンのこの本は、初めから終わりまで上部構造を語らず、人間を考えに入れず、モノを見て人間を見ない」(斯大林改本書从头到尾没有讲到上层建筑、没有考虑到人、见物不见人)原文復刻『毛泽东思想万岁』一九六七年、小倉編集企画、第一五六頁V——資料『毛沢東「スターリン論文」評注』『経済評論』昭和四九年九月号、九八頁参照。訳文は若干紹介者の方でかえた)といっている。なお、最近、矢吹晋訳『毛沢東政治経済学を語る——ソ連政治経済学』読書ノート(現代評論社)がだが、原則的観点と独自の精神にあふれたまことに興味深い本である。

(2) この点についての問題点は細部にわたれば、多々あるけれど、とくに根本的な事柄について、若干の問題をとりあげるならば、まず、社会主義学説については、社会主義社会には共産主義へ移行するまで、階級、階級矛盾そして階級闘争が存在するのかもしれないかという問題がある。それらが存在するとすれば、それらは、具体的にどのような特殊な形態をとってあらわれるのか。社会主義社会に階級闘争が存在するとすれば、A階級V概念をたんに経済的概念(生産手段に対する所有権の関係、これに規定される社会の各集団、グループの相互関係——相互援助、協力の関係か、それとも支配と服従の関係か——、生産物の分配形式)だけでなく、政治的概

念(人々の国家権力(その中枢機構は軍隊と警察などである)に対する実践的かつ客観的な関係)の位置。ついでにひとこといっておけば、とくに、イデオロギーの発展、流布を社会的職分とする知識人の場合、経済生活上の地位よりも、いかなるイデオロギーを社会に普及するのかがということが階級所屬を規定する。もし、このような観点にたれば、マルクス主義の普遍的真理を明確に把握しておくことが、根本的に重要な意義をもってくる)として把握する必要があるのではないか。政治と経済は対立面の統一であるとすれば、一定の条件の下で、両者は相互に転化しあう。階級概念も、政治概念と経済概念との統一である。そして、社会経済制度が根本的に変革されようとする条件の下では、政治と経済のこの矛盾は、主要矛盾の側面が、政治である。△階級V概念を高度な政治的概念として定式化することは、従来あまり明確にされていなかったのではないか。社会主義社会から共産主義社会への移行は、階級闘争を原動力として発展するという思想は、たんに誰かの頭脳のなかで思いつかれたものではなくて、一九一七年のロシア革命以後の長くて苦しい社会主義革命と社会主義建設の各国の実践のなかから抽象され、理論化されたものではないか。こういう問題が一つ。

つぎに、哲学、これは、結局認識論に集約されるのであるけれど、同盟での当該期間における哲学史上の若干の重要な問題としては、一つは、ブハーリンの唯物史観についての問題と、もう一つは、ミーチンによるデボリーン学派批判の問題。後者のデボリーン批判については、中国では、毛

カール・B・ターナー『ソヴェートにおけるケインズ批判の変遷』(一)(小野)

四九(二三二)

沢東は、その著「実践論」、「矛盾論」等々において、中国革命の実践的経験を哲学的に総括するなかで、同盟の当時のデボリーン学派批判の否定的側面を批判的に摂取しているけれど、ミーチン派によるデボリーン批判とはどこかに何らかの相違があるのではないか。ミーチンのデボリーン批判は非常に根本的なある側面では正しかったけれど、ある重要な側面では、また、ミーチンのデボリーン批判には欠陥があったのではないか。あったとすれば、それは何か。今日の日本における哲学上の大きな潮流については、図式的には、所謂「正統派」的マルクス主義(最近、内部は、相当分裂の傾向を示している)は、ブハーリン的であり、反「正統派」的マルクス主義は、デボリーンの傾向を示している。したがって、哲学的基礎からいえば、両者は、同一である。さらにもう一つは、△実践—感性的認識—理性的認識—再実践Vというこの認識のサイクルについては、スターリンはもちろんのことであるけれど、マルクス、エンゲルス、そしてレーニンもあまり明確にしていなかったのではないか。ついでにいっておけば、毛沢東の「人的正確思想是从那里来的?」(人間の正しい思想はどこからくるのか)——一九六三年五月——は短文ではあるけれど、「実践論」、「矛盾論」に勝るとも劣らない非常に重要な現代の弁証法的唯物論の認識論における最新の概括ではなからうか。

経済学上の問題点については別の機会にあらためて論じた

い。(3) ここで、ターナー准教授が、フルンチョフ時代になると、

スターリン時代に比較して、ケインズ批判が厳格でなくなり、ごまかしになってきたことを私は、事実として、当を得ているといったままで、それでは、スターリン時代のケインズ批判が完全であり、十分説得的であったかという点、それは、別問題である。スターリン時代のもろもろの Marxismus の理解の仕方についてはそれらが、戦前の日本のマルクス主義思想におよぼした大きな影響からみても、十分検討を要する。Marxismus は哲学か、科学かというような周知の抽象的な議論ではなくて、Marxismus の普遍的真理を具体的にどう理解するかが、近代経済学批判にも反映する。Marxismus と Revisionismus とを区別する普遍的原则を明確にしておくことが肝心である。

第一章 ソヴェートにおけるケインズ

批判の背景

ジョン・メイナード・ケインズ自身の経済学説の展開過程は、なんと云っても、一九三六年公刊の『雇用・利子および貨幣の一般理論』(『The General Theory of Employment, Interest, and Money』)によって大きく特徴づけられる。『一般理論』以前と以後では、ケインズの経済学の論理構造はかなりちがいをみせているといわれている。⁽¹⁾今、便宜的に、『一般理論』以前のケインズを初期ケインズと呼び、『一般理論』の

ケインズと一応区別しておくならば、ケインズ批判という場合、当然、初期ケインズと『一般理論』のケインズが全体として問題となる。レーニン時代から、ソヴェートにおいては、ずっと、経済学及び政治学の雑誌、文献において、資本主義経済についての論評が数多く掲載され、ソヴェートの経済学者は、所謂資本主義体制の問題、恐慌、失業、独占の成長というような一般的諸問題をとりあつた。けれども、西欧の卓越せる経済学者の経済理論は、そうたびたびとりあげられなかつた。とりあげられた場合でも、A・ハンセンやM・フリードマンの両者が失業の支持者(uptolders)として考察され、都合上、関心あるいは専門を無視していっしょくたにとりあつた⁽²⁾。ただ、ケインズについては例外であった。

レーニン時代からフルシチョフ時代(あるいは今日)まで、ケインズとケインズの業績に対してずっと関心がもたれ、そして言及されてきた。レーニンは、『全世界に大きな反響を起し、ケインズを一躍にして世界的人物たらしめた』⁽³⁾彼の『講和の経済的帰結』(一九一九年)——『The Economic Consequences of the Peace, 1919』——をいちはやくとりあげ、見事な弁証法的論評を加えている。レーニンが、おそらく、

ソヴェートにおいてはじめてケインズに注目し、ケインズを問題にしたのではなからうか。これはとにかくとして、レーニンのケインズ批判は、その後のソヴェートにおけるケインズ批判の原型となった。レーニンのケインズに対する注目は、「ソヴェートの経済学者の眼にケインズを十分認めさせたであらうし、レーニンの数多くのケインズに対する言及は、ソヴェートの経済学者とジャーナリストにより現在まで規則的に利用されてきた」(四ページ)。しかし、問題は、ケインズの『一般理論』であり、『一般理論』のケインズである。レーニンは、『一般理論』を知らずに、一九二四年一月二一日逝去し、『一般理論』の研究、批判はレーニン死後のソヴェートのマルキストに課題としてこされた。『一般理論』は、ターナー准教授が「経済学者のなかでアダム・スミスとダヴィッド・リカード以来、ジョン・メイナード・ケインズほど西欧世界にこのような熱心な支持者をもつたものはなかった」(三ページ)、というのほもちろんであるけれど、『一般理論』の出現は、西欧側以外に、ソヴェートにも新しい意味(new meaning)をもった。何故なら、『一般理論』の主要な意義は、もし、経済体制の諸力が十分に理解され、そして國

家が有効需要と投資についてある一定の機能を果たすなら、安全雇用は達成されうるといふ点にある。⁽⁴⁾これは、ケインズにとっては、資本主義を生命力ある体制(variable system)にくることを意図する。もちろん、これは、ソヴェートにとっては、のろい(anathema)であった。『一般理論』は、西欧の経済学にとって新しいアプローチのための理論的基礎として役立つから、ソヴェートは、『一般理論』とケインズをすすんで無視することができなくなり、初めはゆっくりと、しかし、増徴的な規則性でもって(slowly at first, but with increasing regularity)ケインズとケインズ理論についての論説があらわれた。

一九四八年に、『一般理論』のロシア語訳がでた。第二版は、一九四九年。一九五三年に、日本でも訳出されている。当時、「ソ同盟におけるケインズのもつとも包括的な批判」であるV・S・ウオロディンの『ケインズ批判』が出版された。⁽⁵⁾V・S・ウオロディンのこの本は、所謂冷戦時代(the cold war)の最中の産物であり、ケインズについてのこの時期のソヴェートの立場を明白に示している。

スターリンが死に、フルシチョフが登場すると、ソヴェー

トは「ブルジョア経済理論 (Bourgeois economic theory) とくにケインズ派の影響の拡大に対する注意と批判に専念した」(五ページ)と、ターナー准教授はいう。この時期以後、ブルジョア経済理論に対する関心、注意がいつそう拡大したことは了解されるけれど、はたして、根本的かつ本質的な面において真実の批判になりえているかどうか。このことは別として、ブルジョア経済学に対するこのような徴候は、ターナー准教授がいうように、フルシチョフが平和共存政策に公式的な承認をあたえた、「一九五六年二月の歴史的な第二〇回党大会の結果であった」(五ページ)。

フルシチョフの平和共存政策は、第一義的には、公然とした軍事的闘争をさげること適用されるのであって、東(社会主義)と西(資本主義)のあいだのイデオロギー闘争に適用されるのではないと、ターナー准教授は理解する。ターナー准教授の見解の当否は別として、この政治路線上の変更が、ソヴェートにおいて、西欧の経済理論により密着した吟味を余儀なくさせた。一九六〇年十一月、モスクワで開かれた、八十一カ国共産党・労働者党代表者会議 (the Conference of the Representatives of the Eighty-One Communist and Workers'

Parties)における所謂モスクワ声明は、資本主義世界の現段階を、資本主義の全般的危機の第三段階と規定した。この第三段階説は「資本主義の全般的危機の新しい段階」というタイトルのモノグラフにおいて、科学アカデミー会員のA・A・アルズマニヤンによってくどくど(at length)と分析された。この段階の顕著なる特徴の第一は、世界戦争の必然性は存在しなくなったこと、第二に、この段階は、危機の第一段階、第二段階のように世界戦争の結果生じたのではなく、両体制の競争の結果として、生じたということである。したがって、新しい段階は、平和共存の一般的政策にきちんと適合した。二回の世界戦争にもかかわらず、生き残った資本主義を説明するために、ソヴェートは、そこで、その生存に責任をもつたものは誰であり、何であるかを追求せざるを得なくなった。三〇年代から発生し、資本主義の蘇生を保証した資本主義の修正の第一義的な源泉としてみなされたのが、ケインズとケインズ主義への経常的関心となった。このようなことが、ソヴェートにおいてケインズへの関心が高まった背景であると、ターナー准教授は把握する。ソヴェートにおいては、現代資本主義の主要な学派の基礎としてみられるケインズは、政治

経済学の領域における西欧の主要なイデオロギスト (Theorists) として認識された。このことは、ブルジョア政治経済学のソヴェートにおける現代の批評家の一人であるドウオルキン (Dovzkin) の論説からもしめされる。

第二次世界大戦後、ブルジョア社会におけるケインズ理論の普及は類例のないものであった。ケインズは経済学者とブルジョア政治家の両者により、今や予言者として、今や経済科学の偉大な天才として、今や資本主義の救済者として賛美された。ケインズの処方せんは、事実上、西欧における資本主義国家の政治的プログラムとなった。

(1) 「一般理論」以前と以後では、ケインズの経済学の論理構造が断絶しているとみなす考え方は、ケインズの経済学体系に対する標準的な解釈である。しかし、このような解釈に対して、Axel Leijonhufvud はその著作 "On Keynesian Economics and the Economics of Keynes: a study in monetary theory" Oxford University Press, 1968 に際して異論を提出している。この点については、私の紹介 A・ライオンフット「ケインズ派経済学とケインズの経済学」(一)——貨幣理論の研究——【立命館経済学】第二十二巻第二号所収)を参照されたし。

(2) イ・ゲ・ブリュニン【現代ブルジョア経済学論】(I. G. Bryunin, Ocherki sovremennoi burjuaznoi politicheskoj SSsA, Moskva, 1956, chap. ii.)。日本の近代経済学批判

カール・B・ターナー【ソヴェートにおけるケインズ批判の変遷】(一)(小野) 五三 (二三五)

もこの例にもれない。近代経済学批判の研究をすすめるためには、およそ、つぎのような研究の三段階を経なければ、アカデミックな意味において十分説得力(認識論上からいって、完全なる説得力ははじめから限度があるが。ここで認識論と云っている場合、階級性と真理性とのあいだの関係、あるいは、真理の階級性のことを念頭においている。しかし、認識論自体の根本問題としては、これに、さらに人民性という観点をつけ加えて、真理の階級性という通説的理解——最近の傾向は、これを通説的理解といえるのかどうか疑問であるが——を基礎にすえながら、階級性、人民性そして真理性のあいだの諸関係を再考しなければ、従来のような通説的理解では不十分だと私は思っている)のある批判は展開されえない。まず、第一に、近代経済学批判の基軸になるマルクス経済学の対象、方法、理論、そして性格をどう理解するのかという問題(私見によれば、マルクス経済学の通説的理解では、不十分なところがかなりある。たとえば、経済学の対象規定について、定説では、経済学の対象は生産関係であり、生産力との弁証法的関係で生産関係を研究するということになっているが、さらに、上部構造との弁証法的関係で経済の土台を研究する必要があるのではないか。主に、生産関係と密接に結びついている国家権力及びその他の権力と、生産関係の各項の担い手である人間の思想・世界観との関係において生産関係を具体的に解明するということ。マルクス経済学の研究の出発点として、このように考えるのが正しいとすれば、その他の諸問題についてもかなり再考しなければならないこと

になる。第二に、ブルジョア経済学としての近代経済学の対象(範囲)、理論内容、論理構造についての詳細な知識と根本問題にかんする把握、そして第三に、国内外の従来の近代経済学批判史の整理、総括を必要とすること、以上の三段階である。もちろん、この三つの段階は、相互に有機的に関連しており、第一の段階の研究が終らなければ、第二段階へ進めないというものではない。しかし、近代経済学批判の研究にとりて、第一の段階のマルクス経済学(いま、それがどのように理解され、解釈されているかどうかを別として)を前提するかがり、第二段階をぬぎにしては、近代経済学批判は成立しない。そして、また、歴史的、時間的継起をたんにのみかさねるごとに、近代経済学批判が深化し発展しているという保障はちつとも存在しない。このことは、ソヴェートの近代経済学批判の歴史をみれば明白である。第三段階の近代経済学批判史の総括を通じて、これが、第一段階のマルクス経済学をどのように理解するのかと関係してくる。近代経済学批判を媒介にマルクス経済学の理論構造や方法論のより正しい理解に資することができる。

私の近代経済学批判の研究は、以上のような三段階のルートを通じてすすめられている。

(3) 山田長夫著「ケインズ 世紀の経済学者」壮文社、四六ページ。

(4) 「一般理論」の意義については、注(1)にあげた Akei Leijonhufvud の再考が提起されているので、もっと検討を必要とするであらう。近代経済学内部でも、細部がわたって

みれば、いろいろな解説がなされている。

(5) ユエ・エヌ・ヴォロディン「ケインズ一独占資本のイデオロギ」(Y.S. Volodin, Keins-ideolog monopolisticheskogo Kapitala, Moskva, 1963) B.C. ヴォロディン著、森弘太郎訳「ケインズ批判」(日月社、昭和三二年)として邦訳されている。

(6) ア・ア・アルスマニヤン「資本主義の全般的危機の新段階」(A.A. Arzumanyan, Novyi etap obshchego krizisa kapitalizma, Moskva, 1961)。

(7) イ・エヌ・ドヴォルキン「技術進歩とブルジョア経済学」(I.N. Dvorkin, Tekhnicheskii progress i burjuaznaya politekonomiya, Moskva, 1961, p.5.)。同じ著者に、名和統一・阪本靖郎訳「科学技術革命と近代経済学」(合同出版)がある。

第二章 「一般理論」以前のケインズに

対する初期のソヴェートの見解

ソ同盟のこの時期は、動乱と戦争によって特徴づけられ、社会主義建設は、複雑な階級闘争によってつらぬかれている。新経済政策、指導権のための闘争、第一次五カ年計画、集団化、レーニンの死、トロツキーの敗北、スターリンの勝利等々、これらのすべては路線闘争と階級闘争に密接にからみあっている。

レーニン自身が明示的にケインズについて言及したのは、上述したように、一九二〇年六月二十九日、ロシア共産党(ボ)中央委員会書記局に、ケインズの著作『講和の経済的帰結』(『The Economic Consequences of the Peace', New York, 1920)を至急にロシア語に翻訳するように指示したことに始まる。⁽¹⁾レーニンは、一九二〇年七月十九日、ペトログラードで開催された「共産主義インターナショナル第二回大会」における演説、「国際情勢と共産主義インターナショナルの基本的任務についての報告」で、ケインズのこの本について包括的に言及した。レーニンは、世界の国際的情勢との関連でケインズの本を詳しくとりあつかった。レーニンは戦勝国内部のするどい矛盾(Contradictions)に注目し、これらの矛盾の発展について若干の分析を加えた。

国債をとってみたまえ。われわれは、ヨーロッパの主要国家の負債が一九一四年から一九二〇までに、すくなくとも七倍にふえたことを知っている。とくに大きな意義をもつようになっている、もう一つの経済上の典拠をあげよう。それは、イギリスの外交官であり、『講和の経済的結果』という本の著者であるケインズである。彼は、自国政府の訓令をうけて、ヴェルサイユ講和会議に参加し、それを純ブルジョアのな立場から観察し、問題を地道にくわしく研究し、しかも経済学者として会議に参加した。彼は、

革命家である共産主義者のどの結論よりも有力な、明確な、教訓に富む結論に達した。なぜなら、このかくれもないブルジョアが、ボルシェヴィズムの仮借ない反対者が、結論をくだしているからである。イギリスの素町人である彼は、ボルシェヴィズムをかたわな、狂暴な、残忍な姿にえがきだしている。ケインズは、ヴェルサイユ条約のヨーロッパと全世界が破産にむかつてすんでいるといふ結論に達した。ケインズは辞職した。彼はその著書を政府の鼻さき⁽²⁾にたたきつけて、言った、君たちは無分別なことをやっている、と(傍線—引用者小野)。

レーニンは、戦勝国の国際的な金融上の立場について論じた。レーニンは、イギリスの資産(assets)——一七〇億ルーブリ——は帝政ロシアへの債権(約六〇億ルーブリ)を含んでおり、ケインズは、これらの借金が返済されるであろうと考えないことに注意した。ロシア・ソヴェート政府の代表として、借款契約の一件について、ロイド・ジョージと、クラシンが会議したとき、クラシンは、イギリスがロシアに貸した借款の返済を期待しているなら、それは奇妙な思いちがいをしてい⁽³⁾るのだ、とロイド・ジョージに語った。レーニンは、この問題について、「諸君も知っておられるように、われわれはこの負債は苦にならない。なぜなら、われわれはケインズの本が出るすこしまえに、彼のすばらしい忠告にしたがつた——

いつさいの負債を棒引きした——(あらしのような拍手)」「(レーニン全集)⑩、大月書店刊、二二二頁)。ケインズは、同盟国内部のいつさいの負債(debt)は帳消にされるよう提案した。これによって、フランスは得をし、イギリスはあまり損をせず、ただアメリカがかなり損をするであろう。しかし、レーニンは、ケインズが、アメリカのヨーロッパへの借款を帳消と(writing off)するアメリカの寛大さに依存していることはまちがっていると考えた。レーニンは賠償と戦争の負債の重荷が存するかぎり、アメリカ合衆国は国際貿易を実行することは困難になるであろう、というケインズの考えに同意した。「ヴェルサイユ会議のあらゆる経験をなめてきた、当のケインズが、不屈の決意で資本主義を擁護しようとしているにもかかわらず、またポリシエウイズムを激しくにくんでいるにもかかわらず、その可能性がないことをみとめざるをえないのである」「(レーニン全集)⑩二二五頁)。レーニンは、さらに、ウイルソン(Woodrow Wilson)をえがくケインズの正確さをほめている。「ついでに言えば、私は、共産主義的な激、一般に革命的な激のどれ一つとして、ケインズの著書のなかでウイルソンと実践上の「ウイルソン主義」をえがいている個所に

匹敵することができなとおもっている」「(レーニン全集)⑩、二二五頁)。「労働者大衆は、ウイルソン政策の「根源」が帰するところは、坊主流のたわごと、小ブルジョア的な空文句、階級闘争にたいするまったくの無理解にすぎないことを、その生活経験によって、いまではますますはっきりと見ているが、博学な物知りはケインズの著書によってそれがわかりそうなものである。」「(レーニン全集)⑩、二二五頁)。レーニンは、階級闘争(the class struggle)のテーゼについて説明をつづけたあと、レーニンはヨーロッパとアメリカの小ブルジョアジー、インテリゲンツィア、読み書きのできる何万何十万人の人は、ケインズの例にしたがい、辞職して自国の政府の非をあばいた著書を、政府の鼻さきにたたきつけたケインズのあるいたこの道があるかなければならぬと考へた。ケインズは、自国の生活をすく、イギリス経済をすくうためには、ドイツとロシアのあいだの自由な通商関係を調整しなければならぬと主張した。ドイツとロシアのあいだの通商関係がうまくいくにはどうすればよいか。それは、ケインズが提案しているように、あらゆる負債を棒引きにすることである。しかし、これは、博学な経済学者ケインズだけの

考えではない。何百万の人々がこの考えにいきつこうとしているのである、とレーニンはいう。そして、「私は、ボルシエヴィズムのための、こうした煽動をする経済学者には、共產主義インタナショナルの大会を代表して、感謝の辞をおくべきだとおもう」(『レーニン全集』⑩、二二七頁)とさえレーニンはいつているのである。ケインズが、もし、レーニンのこのような言明を知っていたとしたら、どのようなことをいったであろうか、興味のあるところである。

「ロシア共産党(ボ)モスクワ組織の活動分子の会合での演説」(Speech to the Meeting of the Activists of the Moscow Organization of the RKP.)——一九二〇年十二月六日——で、レーニンは、ソヴェートにおいて外国人に通商上の利権(Commercial concessions)をあたえる政策について、下部からの懸念に対して、その利権のための主要な理由を概観し、このことよってソヴェートはちっとも不利益をこうむらないこと、資本主義諸国のあいだに存在する矛盾を利用しようとする試みであることを説明した。戦勝国内部においても、アメリカとヨーロッパ諸国とは和解することのできない経済的対立を内包しているのである。「ヴェルサイユ会議へのイギリ

ス代表ケインズが彼の著書でやったほどうまく、ヴェルサイユ条約を記述したものはだれもない」(『レーニン全集』⑩、四五六頁)。世界経済を復興させるためには、ロシアの原料を利用することが必要である。ロシアの原料を利用せずにやっていけない。「講和の経済的帰結」という本を書いたケインズが、これを見とめている」(『レーニン全集』⑩、四五八頁)。レーニンは、利権は必要であると結論づけた。しかし、「利権——それは資本主義との平和ではなく、新しい分野での戦争である」(『レーニン全集』⑩、四六六頁)。レーニンは、この戦争は、新しい困難と新しい危険をはらんでいることを承知していたが、ソヴェートは、それら乗り越えることにより、経済的により強力な国になることを確信した。

レーニンは、一九二二年一月二三日、モスクワの「第九回ロシア・ソヴェート大会」で、「共和国の内外政策について」という演説のなかで、ふたたびケインズのことを説き及んでいる。ターナー准教授は、記録によれば、この演説がレーニンがケインズにふれた最後の言及であるといっている。ここでも、レーニンは、以前と同じように、ケインズをとりあつかっており、レーニンは、国際情勢を分析し、ある種の均衡

が国際関係に生じていること、そして、この均衡は高度に不安定である、と分析しているのである。レーニンによれば、ソヴェートは、経済的にも、政治的にも、軍事的にも他のどの国よりも弱体ではあるが、ソヴェートは、資本主義諸国の危機やその矛盾を分析することでは、誰れよりも正しく評価することができた、と。レーニンは、当時の世界が直面している金融問題を例にして、この点について西欧の人々が、これらの考え方を変えはじめたことに注目した。

著名な文筆家ケインズは、その著書が各国語に翻訳されており、彼自身ヴェルサイユ会議の参加者であつて、自国の歴代政府を援助するために全力をつくした人であるが、このケインズのような人々でさえ、いまやその論調を変えている。このケインズでさえ、その後、社会主義をのろいつづけながらも、この道を捨て、この道から去らないわけにはいかなかったのである。くりかえして言うが、彼は、ポリシエウイズムを口にしていないし、ポリシエウイズムのことを考えることさえしていないのだが、資本主義世界にむかつて、「君たちのやっていることは、君たちを抜き差しならない状態に陥れるものだ」と言い、戦債全額の棒引に類することさえ提議しているのである。

ソヴェートはツァー時代の負債を破棄した。レーニンは、西欧もソヴェートの例にしたがうものと考えた。レーニンの分析は、ケインズに対してそれ以上ふれないで、進められた。

レーニンは、条約後の経済的困難については、ケインズに同意したけれど、条約後の世界についての期待については両者が異なっていたのは明白である。レーニンは分裂が継続することを欲した。他方、ケインズは、もうこれ以上の災厄を欲せず、災厄をふせぐためにこの本を執筆した。「レーニンは革命を望み、ケインズは平和を希望した。レーニンはボルシェウイズの拡大の側に立ち、ケインズは、修正された形態にもかかわらず資本主義の継続的存立と西欧のその制度の側に立った」(十二ページ)。

しかしながら、レーニンのケインズに対する見方は、二三の表現上の悪口(Invective)は別として、調子において比較的好意的(Generally favorable)であつた。この見方は、『一般理論』公刊以前のケインズに対する一般的な態度の典型であつた。これは、一九三六年のソヴェート百科辞典(Bolskaya Sovetskaya Entsiklopediya)の第一版におけるケインズの項目により立証される。『一般理論』以前に書かれたこの項目を、全部そっくりそのまま引用する。

KEINS (Keynes) ジョン・メイナード・ケインズ(一八八三年生れ)。有名なイギリスの経済学者、ケンブリッジ大学教授、エコノミック ジャーナル編集者。一九一九年ヴェルサイユ平和条

約のイギリス大蔵省の代表であった。ヴェルサイユ条約をするどく批判し、その経済的実行不可能性(とくにドイツの賠償問題)を証明する。「ケインズが彼の著書でやったほどうまく、ヴェルサイユ条約を記述したものは誰もいない」(『レーニン全集』④、四五六ページ)。ケインズは貨幣数量説の擁護者である。ケインズの観点からは、経済恐慌は通貨(管理通貨)の規制的手続きにより克服される。ケインズは、大蔵大臣チャーチルによる金本位制の再建をイギリスの経済的困難の源泉として考察した。若干の留保をつけて、ケインズはマルサスの見解を支持する。ケインズはイギリスの大きな保険会社の会長である。

主要業績：『インドの通貨と金融』(一九一三年)、『講和の経済的帰結』(一九一九年、ロシア語訳：Ekonomicheskie posledstviya Versalskogo mira, M., 1922)、『条約の改正』(一九二一年、ロシア語訳：Pereimot mirnogo dogovora, M., 1922)、『貨幣改革論』(一九一三年、ロシア語訳：Traktat o denezhnoi reforme, M., 1925)、『ロシア管見』(一九二五年)、『自由放任の終焉』(一九二六年)、『貨幣論』(一九二九年)、『説得評論集』(一九三二年)。

上記の『大ソヴェート百科辞典』における項目のなかで、レーニンの言明の引用は別として、ケインズのそれは、当期の西欧における標準的な参考文献のなかでみいだされるケインズについての説明と何ら区別するところはない。一九五三年の『大ソヴェート百科辞典』の第二版の項目のそれと比

カール・B・ターナー『ソヴェートにおけるケインズ批判の変遷』(一)(小野) 五九 (二四一)

較するとき、第一版のこれが、ソヴェートの原型であったと信じることは困難になるであろう。第二版の最初の書き出しの文章はそのことを示すのに十分である。

Keynes, ジョン・メイナード・ケインズ (一八八三—一九四六) — イギリスの俗流ブルジョア経済学者、帝国主義の反動と戦争のイデオロギスト。イギリスの素町人である彼は、ポリシエヴィズムをかたわな、狂暴な、残忍な姿にえがきだしている、かくれもないブルジョア、ポリシエヴィズムの仮借のない反対者として一九二〇年レーニンによって暴露された。(『レーニン全集』④、二二一ページ)。

レーニンのボルシエヴィズムの決定的な敵対者としてのケインズに対する言及は、考察されている当該期間中には、その前後関係からきりはなされて引用されなかった。しかしながら、のちの時期になると、この説明は、レーニンのもともとの好意的な前後関係からきりはなされて、ソヴェートの経済学の文献のなかで、ケインズに対するどのような言及に対しても標準的なタイプとなった。一九五八年の『小経済学辞典』⁽⁸⁾では、ケインズに対してつぎのようにのべている。「ケインズの立場の階級の本質は、すでに一九二〇年に、レーニンによって、あますところなくばくろされた。レーニンの評価によると、ケインズは有名なブルジョアで、ポリシエヴィ

ズムの仮借ない敵であり、イギリスの素町人にふさわしく、ポルシェヴィズムを醜惡、凶暴で、野獸のようなものと考えていた(『レーニン全集』⑩、二二一頁)。

多くの例が示しているように、ソヴェートの著述家がケインズについてふれるところでは、レーニンがつかつた「ポルシェヴィズムの敵」がよく引用された。しかしながら、レーニンは、他方で、講和の諸結果を理解し、分析するケインズの能力を認めていた。二〇年代の大部分の言及は、通常、経済恐慌と関連してのみケインズが引用された。

レーニンは、さきにも述べたように当時の国際情勢を分析するなかで、ケインズの著作をとりあげ、反面から、ブルジョア経済学者の事実に関する研究を上手に利用した。ソヴェートの同じ時期に、レオン トロツキー(Leon Trotsky)とE・ヴァルガ(E. Varga)も、やはり、国際情勢について分析しているけれど、このときにはケインズについては言及していない。トロツキーはヴァルガと協力して起草したテーゼが、コミンテルン第三回大会で採択された世界情勢とコミンテルンの任務とに関するテーゼ(一九二二年七月四日)である。これは、オイゲン・ヴァルガ著『資本主義経済の没落』(西雅雄訳、

白揚社出版、大正十三年十一月)に全文が掲載されている¹⁰⁾。しかるに、トロツキーは、一九二二年六月二三日の共産主義インターナショナル第三回大会での「世界経済恐慌と共産主義インターナショナルの新しい任務についての報告」で、国際情勢について論じながらケインズについて言及した。トロツキーは第一次世界大戦後のヨーロッパの分裂をとりあげてつぎのようにいう。

戦争はなぜおこつたか? それは、生産力がもつとも強大な資本主義国の枠のなかでもあまりにも圧縮されていたためだ。帝國主義的資本主義の内部衝動は、生産力の発展を制限する関税やそのほかの障壁を廃止して、国境を撤廃し、地球ぜんたいをにぎることにあつた。ここに帝國主義的経済的基盤があり戦争の根本原因があるのだ。その結果はどうだつたか? ヨーロッパでは現在国境や関税障壁はまえよりもおこなつてゐる。銀河系のような小国群が形成されている。かつてのオーストリア・ハンガリー帝國の領土には現在一ダースの関税線が交错している。イギリス人のケインズはヨーロッパを精神病院と呼んだが、じつさい、経済の発展という観点からみれば、閉鎖主義、関税制度、等々をもつ小国の排他主義ぜんたいは、ひどい時代錯誤、中世主義の二〇世紀への氣違ひじみた移植をあらわしている。バルカン半島は野蠻化されつつあるいっぽう、ヨーロッパはバルカン化しつつある(傍点引用者小野)。

上記のテキストのケインズの名前のところに、トロツキーがケインズにかんしての情報としてあげた脚注がついており、それはこうである。

Keynes——有名なイギリスの経済学者。一九一四—一八年戦争のあと、かれは連合国最高経済会議のメンバーとなった。ケインズは、そのいくつかの著書で、ヴェルサイユ条約の経済的無意味さを効果的にあきらかにした。一九一九年、かれはヴェルサイユ条項は実施される可能性はないと予言した。ここでいっているのは、かれの著書『平和の経済的諸結果』だ。今日、ケインズは、ヨーロッパや世界にとっていまやもつとわるいヴェルサイユを準備しつつある人々のひとりだ。

これが、トロツキーがケインズについてふれた唯一のものではない。ロシア科学アカデミー創立二百周年記念(the two-hundredth anniversary celebrations of the founding of the Russian Academy of Sciences)で、トロツキーは、『D. I. Mendeleev and Marxism』(D. I. Mendeleev and Marxism)という演題で、一九二五年九月一七日、純粋応用化学第四回メンデレーフ会議(the Fourth Mendeleev Congress for Pure and Applied Chemistry)において演説をした。トロツキーはメンデレーフは、若い頃、一五〇年から二〇〇年以内に入口が一兆にたとえなつたとしても、将来の科学は、必要なら、

さらに多くの人々のための生存手段を発見するであろうから、マルサスに関心をもつことを拒絶した、ということの説明しながら、メンデレーフのマルサス観について語った。トロツキーは、この演説のこの点で、ケインズについて言及している。

人口の成長の制限について、イギリスの教授ケインズがこれらのアカデミックな記念にさいし提起した時宜を得た忠告は、我々の偉大な化学者や産業上のオプティミストからは最少限の同情をもつても同意されないであろう。ドミトリ イワノヴィッチ メンデレーフは、彼自身の古い言葉：

「これらの新マルサス主義者は人口成長をとめることを望んでいないのか？ 私の意見では、我々は増加すればするほどそれだけそれは楽しくなるであろう」をただくりかえしたであろう。

上記のケインズに対する言及に対してつぎのような注釈がつけ加えられていた。すなはち、

No. 91. ケインズ教授—著名なイギリスの経済学者、一九二五年九月十四日、国民経済ソヴェート最高産業経済会議(the Industrial Economic Council of the Supreme Soviet of the National Economy)の総会でイギリスの経済状態についての報告をした。この報告で、ケインズは、イギリスにおける失業の主要な原因は、労働力の成長が、労働力の自然的減少よりはるかに超過していることであると説明した。ソ同盟の失業問題について、

ケインズ教授はこのように問題を表明した。

私は、戦後のロシアの貧困は例外的な人口増加からまったく生じたと仮定している。現在ふたたびわれわれは出生率が死亡率をこえて増加していることに注目している。ロシアの将来の経済にとって、これももっとも大きな危険である。国家政策のもっとも重要な問題の一つは、この国の人口成長と労働力の発展とのあいだのある関係を達成することである。¹⁸⁾

トロツキーはケインズの分析の欠陥をみつけ、特定の自然科学(Physical science)の法則を社会科学の研究に應用することに反対するよう科学者に警告した。マルサスやケインズの場合そうであったように、正しくない方向(Incorrect line)がとられたときに混乱が生じたのであると、トロツキーはいう。

トロツキーは、会議がこれらの教訓を正しく理解したので、人口は、ソ同盟では問題はなくなるであろうと、確信をもっていきった。しかしながら、人口と失業はイギリスでは問題としてのこった。イギリスは工業化をなしたけれど、イギリスは、この問題を救済するために移民に訴えなければならなかった。「もっとも、進歩的」な経済学者ケインズ(The most 'progressive' economist, Keynes)でさえ、イギリス経済のすくいはマルサス主義であるということを、わずか数日前に、われわれに報告した¹⁶⁾。トロツキーは当時としては最近のケ

インズの活動に精通していたことはあきらかである。ハロッド卿の『ケインズ伝』(The Life of John Maynard Keynes" by R. F. Harrod)では、ケインズのロシア訪問について半頁もついでいせず、最高経済会議(the Supreme Economic Council)でのケインズの講義に言及していないのを注目しておくことは興味がある。¹⁷⁾

翌年の一九二六年、ケインズは、トロツキーの「イギリスは何処へ行く」¹⁸⁾を論評した。「トロツキーのイギリス論」である。ケインズの批評は、ケインズの未来観とトロツキーのそれとのあいだの本質的な相違をすくなく浮彫りにしている。ケインズは、トロツキーのこの本について、「イギリスの問題にかんするその独断的な論調は、論議の対象になっていることがらについての免れがたい無知のうちに著者の洞察的な閃きが包まれているばあいさえも、イギリスの読者に気になるものではありえない」¹⁹⁾、といている。ケインズは、トロツキーの文章の本質を革命ぬきに社会主義へ移行しようとするイギリス労働党にむけての攻撃であるとみていた。歴史的過程についてのトロツキーの諸命題²⁰⁾のとりあつかいについて、ケインズは、トロツキーの諸命題は論理的であるけれど

も不完全な仮定、すなわち、「社会の転形にかんする道徳的ならびに知的問題がすでに解決されてしまっている」ということ——すなわち、計画は存在していて、それを実施する以外にはなにも残っていない」ということにもとづいているとみなした。ケインズは、人間の問題を解決するためには、理性の利用に訴えるべきで、トロッキーの学説、暴力のまったくの無益性 (the utter uselessness of force) を告発している。

「次の手には頭を使うべきで、拳骨はまだ出る幕ではない」⁽²²⁾

スターリンの著作には、ケインズについての論及は直接みられない。おそらくこれは、スターリンの演説と著作の性質によるのである、とターナー准教授はいつている。国際情勢について語る時、スターリンは非常に一般的な用語で自身自身を表現した。スターリンのスタイルは、レーニンあるいはトロッキーのそれより、より単純でより直接的であった。スターリンの演説のなかには、マルクスあるいはレーニン、スターリンの直接の敵対者以外にいかなる人々に対する言及もほとんどふくまれていない。経済恐慌をとりあつかうときには、スターリンは、後年になってなじみになった型を示した。スターリンの「たえずあちこちと変る」分析 (‘roving’

analysis) の例は、スターリンの一九三〇年六月二七日の「ソ同盟共産党 (ボ) 第十六回大会にたいする中央委員会の政治報告」にみられる。

種々さまざまな恐慌「理論」が案出されている。数多くの恐慌「緩和」策、「防止」策、「一掃」策が提案されている。ブルジョア野党は、恐慌の防止に「あらゆる手をつくさなかった」らしい。ブルジョア政府を攻撃している……経済恐慌の原因を「ポリンエヴィキの策略」と考えたと云った賢人までいる……。

これらすべての「理論」と方策とが、科学とは縁もゆかりもないことは、わかりきったことである。ブルジョア経済学者が恐慌をまえにして完全に破産したことを、みとめなければならぬ。それだけでなく彼らは、彼らの先輩たちにはないとはいえない、最小限の生活感覚までもなくなってしまう⁽²³⁾。

この報告で、スターリンは賠償問題について論じた。スターリンは、ケインズが以前にやったように、ドイツは、賠償 (indemnities) を支払うことはできないであろうと結論づけ、ドイツのプロレタリアートは、戦勝国により搾取されることをゆるさないであろうとつけ加えた。ケインズは、諸政府が条約を無理矢理に実行することは狂気のさたであると考えた。スターリンは、同様に、ドイツのプロレタリアートが闘争なしに賠償を支払うであろうと、もし、諸政治家が信ずるなら、

彼等は、気がくるつていと考えた。⁽²⁵⁾ スターリンは、ケインズに対する謝辞(acknowledgment)ないしは言及はないけれど、講和の諸結果については、スターリンとケインズのあいだには類似性があった。

ソヴェートの経済学者は、西欧におけるケインズの影響の増大と立場に注目しはじめた。N. N. Lyubimov と A. N. Erlikh は、一九二二年のジエノア会議(Genoa Conference)のロシア代表で、のちの回想のなかで、当時の政治的雰囲気についてあきらかにしている。

ドイツでは、実業家と政治家は、ヴェルサイユによって生みだされた賠償のもつれで苦心していた。経済学者ジョン・メイナード・ケインズが全賠償体系の再検討を要求し、そしてソヴェートロシアとの妥協を力説していたイギリスでは、大規模な失業とヨーロッパ及び自余の世界との貿易の減少は、政治的溫度を押し上げつつあった。⁽²⁶⁾

Chicherin、ジエノアのロシア代表団長は、ケインズの新聞『条約の改正』の紹介をみて、これが同志レーニン(Comrade Lenin)が、かつていつていた本であるかどうかいぶかった。彼は、できるなむら、その地でその本を買うようにし、できないなら、帰途、ベルリンで買うように手配するよう命じた。⁽²⁶⁾

科学アカデミー会員、E・ヴァルガ(ソ同盟の歴史を通じてもっとも著名な経済学者の一人)の初期の仕事のなかにケインズに対する言及がみられる。「今日のブルジョア経済学のもう一人の権威たるケインズもまた、子供らしく頼りなくマルクス主義に対抗している」(ヴァルガ著益田豊彦訳『安定後に於ける資本主義没落期の経済』叢文閣版二五ページ)として、ケインズのマルクス主義観にふれている。

ケインズは、自国イギリスの白熱せる経済問題の論争で重要な積極的な役割をはたすかたわら、ケインズは、時間をみつけて、二度ロシアを訪問し、ソ同盟についていくつかの文章を書き、ソヴェート経済の進歩と性質についてしばしばコメントを加えている。さきに述べたように、ハロッドの伝記には、この時期のケインズのロシア訪問についてはほとんどふれられていない。だが、ソヴェートでは、『大ソヴェート百科辞典』の第一版には、ケインズの主要業績がリストアップされ、ケインズのいくつかの業績は、ロシア語に翻訳されている。しかし、『講和の経済的帰結』以外は、ほとんどコメントがなされていない。ケインズがソヴェート事情についてしばしばコメントを加えていることと比較すると、この時

期に、ソヴェート側よりケインズに対してより広範な言及がないのは驚きである。

一般的にいって、ソヴェートは、経済学の領域において、主要な敵 (main opponent) としてケインズを確認していなかったことから、いかなる時期よりこの時期にはケインズを好意的にみていた。このことは、『一般理論』がでる以前では、まったく驚くことではない。ケインズのヴェルサイユ条約に対する高度に批判的な見地と賠償に対するケインズの態度が、ソヴェート側に受けいられたからである。第一次世界大戦後のこの時期のケインズの批判のいくつかは、議論としては (as arguments)、当時の世界における資本主義体制に対していた。『一般理論』の出現以前でさえ、その当時の時事的な経済問題に対するケインズの見識ある分析のために、ソ同盟では、ケインズは尊敬されていた。

(一) 『ロシア共産党(ボ)中央委員会書記局あてに宛て書きを書き』、国立出版所にたいし、新しい経済問題の著作の翻訳出版を組織し、十七世紀と十八世紀の唯物論者の一連の著書の翻訳を出版するよう義務づけることを提議する(『レーニン全集』⑩のハレーニンの生涯と活動、五九六ページ参照のこと)。ここでいっている新しい経済問題の著作がケインズ講和の経済的帰結』である。このケインズの著作は『レーニン

カール・B・ターナー『ソヴェートにおけるケインズ批判の変遷』(一)(小野) 六五 (二四七)

スキー・ズホルニク』(Leninskii sbornik, 3rd ed.; XX XV (Moskva; 1945) 所収) 翻訳者不明。

(2) 『レーニン全集』⑩大月書店刊 二二〇〜二二二ページ。

(3) 前掲書、二二二ページ。

(4) J. M. Keynes, The Economic Consequences of the Peace, The collected writings of John Maynard Keynes, Vol. II, Macmillan St. Martin's Press, 1971, 〇章、七章、第三節。

(5) 『レーニン全集』⑩一四〇ページ。

(6) 『大ソヴェート百科辞典』(第一版)——Bolshaya Sovetskaya Entsiklopediya, 1st ed.; XXXII (Moskva, 1936), 142。——

(7) 『大ソヴェート百科辞典』(第三版)——Bolshaya Sovetskaya Entsiklopediya, 2nd ed.; XX (Moskva, 1953), 488。——

(8) 『経済学小辞典』(エズルフ、メルヴァン編)ソヴェート研究者協会訳、青木書店 一九六〇年)とて邦訳されてゐる。

(9) 前掲の『経済学小辞典』七三三ページ。

(10) The Communist International 1919-1943. Documents, Vol. I, selected and edited by Jane Degras, Frank Cass & Co. Ltd. 1971. pp. 229-39, 荒畑寒村、大倉旭、救仁郷 繁訳『コミンテルン・ドキュメント』(現代思潮社) 二〇一〜二九二ページにも抜萃 (extracts) が訳出されてゐる。

(11) 『トロツキー選集 コミンテルン最初の五カ年上』1 (現代思潮社) 二二八〜二二九ページ。

- (12) 前掲書 四四九ページ。
- (13) エリ・トロツキー『全集』（L. Trotski, Sochineniya, XXI (Moskva, 1927), 268-88.
- (14) エリ・トロツキー、前掲書、二八四ページ。
- (15) エリ・トロツキー、前掲書、四九五ページ。
- (16) エリ・トロツキー、前掲書、二八六ページ。
- (17) R. F. ハロッド著、塩野谷九十九訳『ケインズ伝』下（東洋経済新報社）四〇九ページ。
- (18) The Russian edition was Kuda idyot Angliya? (Moskva, 1925)
- (19) J. M. Keynes, "Trotsky or England." The Collected writings of John Maynard Keynes, Vol. X, Macmillan St. Martins Press, 1972, p. 63. 熊谷富夫・大野忠勇訳『人物評伝』（岩波現代叢書）「六六」ページ。
- (20) ケインズは「トロツキーの諸命題を四つの命題に要約して」云々。前掲書、前掲訳を参照のこと。
- (21) Op. cit., p. 66. 前掲訳「七〇」ページ。
- (22) Op. cit., p. 67. 前掲訳「七一」ページ。
- (23) 『ソ同盟共産党第一六回大会政治報告』（国民文庫）二二一—二四二ページ。
- (24) 前掲書「三〇」ページ。
- (25) N. N. Lyubimov and A. N. Erlikh, "The 1922 Genoa Conference," International Affairs (Moscow), 1963, No. 6, p. 65.
- (26) N. N. Lyubimov and A. N. Erlikh, International Affairs, 1963, No. 10, p. 77.

第三章 ケインズに対するソヴェートの

立場（1936～1948年）

一九三六年に『一般理論』は公刊されたが、ソ同盟では、二年間無視されてきた。一九三八年まで『一般理論』についての言及はなかった。⁽¹⁾ このことは、しかしながら別に驚くべきことではない。何故ならば、『一般理論』は、西欧においてさえもおいちいきのいい心からの歓迎を批評家によって受けたのではないということ。「多くの熱心な書評がわたくしの注目をひいたが、そのうちにはいちじるしく批判的なものがたくさんあるのである」⁽²⁾と、セイモア・E・ハリスはいつている。一九三六年—二月二九日の American Economic Association の総会で、アルヴィン・ジョンソン (Alvin Johnson) 教授の会長演説において、ジョンソン教授は、経済学者に「社会が経済学者に正当に要求するであろう仕事を効果的に組織する」⁽³⁾ よう訴えたけれど、ケインズとケインズの理論にはなれなかった。ソヴェートで、ケインズの業績が無視されたもう一つの別の理由は、一九四八年までロシア語に翻訳されなかったことによる。それにしても、ケインズ『一般理論』

は、英語を流ちょうに話せる人々にとって決して読み易いものではない。

この時期の初めのあいだ経済学の教科書や関連する文献の中には、依然として、『一般理論』についての言及でなく、ケインズについての言及はつづいている。アカデミー会員、E・ヴァルガは、「金ブロックの終焉と全般的危機の時代の通貨問題」(『The End of the Gold Block and the Currency Problem in the Period of the General Crisis』)において、『貨幣論』の著者としてのケインズについて考察を加えている。

ヴァルガによれば、「資本主義の危機は通貨と利子率の操作によりなくすことができる」というケインズとその派の理論、*de Man*の協力により、社会民主党の内部にかなり深く滲透したところの理論は、俗流で、表面的で、そしていつわりである。ヴァルガ⁽⁴⁾は、資本主義国は、通貨操作により資本主義の諸問題を解決することはできない。何故ならば、交換の領域における人工的な介入は、生産に影響することはできず、ただそれはあまり重要でない程度に修正することができるのみであるからであると、主張した。

ソヴェートの経済学者、アトラス教授(Professor Z. Atlas)

カール・B・ターナー『ソヴェートにおけるケインズ批判の変遷』(一)(小野) 六七(二四九)

は、ウイゴドオスキ(Vygotskii)の『アメリカ合衆国の信用と信用政策』(Credit and Credit Policy in the U.S.A.)の評論のなかで、やはり、ケインズの『貨幣論』に言及している。ウイゴドオスキは、この本の中で、つぎのようにいっている。

「あるブルジョア経済学者は、一九二九年におこった株式相場場の崩落にもかかわらず、この政策(連邦準備銀行の公開市場操作)をほめつけ、この政策のなかに規制の思想の勝利をみている⁽⁵⁾」。そして、『貨幣論』からながながと引用し、ケインズによれば、通貨流通により管理は可能であることを証明しているから、一九二九〇年のにがい出来事にもかかわらず、一九二三年から一九二八年までの連邦準備銀行のドルの管理は一つの勝利であったことを示した。

世界経済恐慌(the world economic crisis)は、この時期のソヴェートにおいてとくに強調された。しかし、一九三八年までは『一般理論』に対する関心はなかった。ところが、不思議なことに、一九三七年の一月の二二日、一三日をして一日付のロンドンタイムズにでた『How We Can Avoid a Slump』と名付けられたケインズの論文だけが、『一般理論』にふれる前に、簡単なコメントを受けた。ソヴェートによる

と、ケインズのこの論文は、イギリスに新たな恐慌が近づいているので、イギリスの経済学者のあいだで不安(uncertainty)があることを証明している。一九三八年、ヴァルガは、西欧の経済科学が現存の恐慌を解決する力を欠いていると言明している。

ブルジョア経済科学は、今日まで、資本主義の下で故一般的な過剰生産恐慌が不可避であるかについて理解しなかったしあるいは説明することを欲しなかった。現在のブルジョア科学の議論は、ブルジョア科学がいまから一〇年まえにあたえた議論と異なるところは何にもない。循環、恐慌そして資本主義経済の諸条件についてのブルジョア経済学者の新しい本は、この点について明白である。あらゆることがブルジョア経済学者に古い仕方で行ってまわっていると思定することができる。恐慌の原因についてのブルジョアの議論には何も変化はなかったし、ブルジョア理論経済学は何ら新しい議論をあたえていない。

しかし、ヴァルガは、事実が事実であるから、その事実を説明しなければならぬと、つづけていう。ヴァルガは、恐慌をとりあつかう二つの学派について言及する。一つは、カウツキー、ヒルファードイニング、ブハーリンそしてオットー・バッアの比例理論(the theory of proportions)の支持者。もう一つの学派は、貸付資本の不足から恐慌現象を説明する、ケ

インズとウイクセル(Wicksell)の学派である。このように、この時期のソヴェートの世界経済問題での指導的権威(leading Soviet authority)や関連雑誌への定期寄稿者は、当面の経済恐慌を把握するため西欧での注目すべき試みである『一般理論』の取あつかいに失敗した。

『一般理論』を最初にとりあげたのは、L. Freimanの「資本主義諸国における失業」(“Unemployment in the Capitalist Countries”)においてであった。Freimanは、失業問題と失業問題解決の試みに焦点をあわせた。彼はいう。

ブルジョア経済学者は、資本主義の全般的時期の失業の特殊な性格を隠蔽するためあらゆる努力をしている。資本家階級の社会的命令(social commands)をはたすため、もっとも卓越せるブルジョア経済学者は、失業が資本制社会の枠組の内部で克服することができるということを、科学的に「証明しよう」と試みている。かくして、『雇用・利子・及び貨幣の一般理論』と名付けられた老大な仕事をした有名なイギリスの経済学者は、あらゆる労働力を生産に集中するには、投資と社会の成員の個人消費を増大させることが必要であるという結論に到達した。ケインズの意見では、この投資の増大は、利子率の切下げによるか、あるいは、ケインズが実現のためのより大きな機会——国家のプロジエクトの創出であると考える何か——により実現されることが出来る。干渉力をもつ、国家は、人々の異なる諸段階層のあいだに所得の再分配

を保証するような諸手段（租税、社会事業等）により個人消費を増大させような行動をしなければならない。

人は、ケインズの結論が新奇であるといわないであらう。資本主義を修繕つぎはぎするという類似の考え方は、昔々から、アメリカ合衆国やその他の国々における各種の教義の改良主義者により提起されていた。経済の実態は、数えきれないほど回も、資本主義体制を救済するためのこれらのすべての処方箋の不適確性を証明してきた。この深刻な経済循環恐慌はアメリカ合衆国では現在いっそう深化している。この恐慌は、割引率の例外的な低水準の出現と国家の拡大的な分配計画にもかかわらず、生じているからに大量の失業の増大と結合している。

Freiman は、上記のバラグラフの脚注で、一九三七年九月、連邦準備銀行一パーセントの割引率と、一九三八年六月の三七〇億ドルの失業対策に対する議会の承認についてふれた。Freiman は、ケインズが、ブルジョア経済科学の別の支柱(Another pillar of bourgeois economic science)であるカッセル(Cassel)からすると、非難を受けたことを主張している。しかしながら、ケインズに対するカッセルの批判は、Freiman によりあまり同情的に受けとめられていない。Freiman は、カッセルを、「国民経済の均衡についての古い諸理論を忘れていず、戦後の資本主義の発展における新しい特徴の観察から何も学んでいない、資本主義が何らかの種類

の人為的措施も必要としないということを考える、資本主義の熱心な弁護論者(a zealous apologist)である」と考えた。

Freiman によれば、カッセルは、ケインズ理論を貯蓄に対する戦争宣言("a declaration of war")とみなし、「ケインズによる観察の諸結果はいかなる場合においても、経済科学の最後の言葉」としてみなされることはできないということのカッセルのブルジョア的な読者にとりあえず確信させる」ことであると。Freiman は、カッセルの思想を批判的に検討しつつづけているが、カッセルのいかなる仕事についてもふれていない。Freiman のケインズに対する議論は、『一般理論』の内容について言及はなくて、英文のタイトルが、何らそれ以上の情報もなしに脚注に示された。したがって、ロシアの読者は、出版社、出版年月日、出版場所について知らないだろう。しかしながら、その論文は、すくなくとも、ケインズ理論の一般的思想を読者にあたえたし、カッセルよりも好意的な照明をケインズにあてた。論文の残りの部分は、主要な諸国の雇用の姿を概観しており、いたるところの深刻な失業の存在をウィウッドに描写した統計でいっぱいであった。結論は、資本主義の制度的枠組のなかでこの

問題を解決しようとする企図の望みのなさを強調し、そして、
経済の実態は、明白にこれを証明していると主張している。

三〇年代のおそくには、『一般理論』に言及することなしに
諸論文がつづけてでてきた。たとえば、イギリスの経済恐
慌("The Economic Crisis in England")というタイトルの展
望的論文における P. Polyak は、ケインズについてちっと
も言及しなかった。Polyak は、イギリスの経済的立場を論
評し、経済学者についてたつたこれだけしかいっていない。

「イギリスの経済上の立場の分析においてブルジョア経済学
者や卓越せるイギリスの資本家は、アメリカ合衆国における
現在の恐慌——彼等が「不況」(depression)とっているが
——に対する責任を負っている。というのは、合衆国におけ
る恐慌の開始がイギリスの経済状況の悪化に導いたからであ
る」⁽¹⁷⁾

三〇年代の終りになると、『一般理論』とケインズに対す
る論述が、数多くの書評の中に発見される。S. Goldin の西
欧の経済学者ユルゲン クチンスキー (Jurgen Kuczski) の
『賃金理論の新しい形態』(New Fashions in Wage Theory,
London, 1937)の書評は、賃金と関連してケインズに言及した

最初の説明であった。⁽¹⁸⁾ Goldin は、クチンスキーを反ファッ
シスト経済学者(an anti-fascist economist)として分類し、ク
チンスキーのケインズに対する批判的な取りあつかいと解釈
に賛成し、Goldin は、ケインズに対して、書評のなかでつ
ぎのようにいっている。

ケインズは、また、賃金の切下げに賛成しているが、彼は、他
の目的からそれに接近している。ケインズは、賃金の切下げを隠
そうと試み、労働者が防衛することが困難で、資本家の攻撃(「
crachment」)に対して労働者の反対を弱めようとする、労働者の
生活水準の切下げの手段を示している。

ケインズは、恐慌の理由は、「資本の限界効率」の現実的低落
あるいは予想の低落であると考える。この「資本の効率」("the
efficiency of capital")の低下に対して、一つの基本的な救済は、
物価の上昇にともなう債券に及ぼす利子率の切下げである。この
ようにして、ケインズの意見では、全経済—生産、雇用等々に作
用するところの投資をある仕方方向づけ、管理することが可能
である。

ケインズは、この理論から出発して、彼は、貨幣賃金の「安定」
を要求するが、同時に、物価上昇の手段による実質賃金の低下を
弁護する。

ケインズは、資本の利潤を増大させ、労働者の生活水準を低下
させ、そして労働者の搾取を強化する、「計画的な」仕方⁽¹⁹⁾で諸対
策を導入するであろう国家に、諸対策の実現をまかす。

資金についてのケインズのこの曲解された解釈は、この主題についてのその後の言及の標準になった。実際に、ケインズは、短期においては、安定せる資金政策に賛成したが、長期には、安定的な物価をともなった賃金の上昇に賛成した⁽¹⁴⁾。Goldinの見解では、たとえ投資は、恐慌の主要原因として言及されたとしても、賃金問題は、圧倒的な重要性があたえられた、と。にもかかわらず、Goldinは、ケインズの業績を以下のような推薦に値する十分価値あるものと考えた。「この本は、疑いもなく、ソヴェートの読者の注目に値する⁽¹⁵⁾」。

もう一人のソヴェートの権威、モスクワ大学のブリューミン教授(L. G. Blyumin)は、E・ロールの『経済思想の歴史』(A History of Economic Thought)を論評するときに、『一般理論』についてざっと言及している⁽¹⁶⁾。ブリューミンは、二〇年代から、一九五九年の死ぬまで、西欧の経済思想にかんする主要なソヴェートの専門家の一人であった。このことは、もつとも早い時期のケインズに対する言及にあらわれている。ブリューミンは、経済学における古典学派の地位と子孫の問題に関心をもちた。俗流ブルジョア経済学者は、イギリ

スの古典学派とマルクスのあいだの関係を切断しようとしていると、ブリューミンは主張した。後の見解では、これらのブルジョア経済学者は、スミスとリカードを彼等自身の俗流的なイメージで解釈し、労働価値論からスミスとリカードをきりはなそうと試みた、と。ブリューミンはこの傾向が増大しているとみる。「たとえば、『雇用、利子、及び貨幣の一般理論』というセンセーショナルな本のケインズは、マールシャルと同様に資本主義を俗流化した人であり、資本主義の弁護論者の中に数えられる。ケインズの意見では、古典学派は、ビグー(イギリスにおける現代の俗流経済学のもつとも卓越せる代表者)という個人の中に現在イギリスでは存在している⁽¹⁷⁾」。ブリューミンによれば、ロールが、古典学派の最後の人としてJ・S・ミルを考察した点において正しい見解を提示し、この学派の教義の有機的な一部分として労働価値説を含ませしめたことは絶対的に正しかったと、している。

第二次世界大戦に入る前、「ハーバードの経済学者とブルジョア経済学的観測」⁽¹⁸⁾ ("The Harvard Economist and Bourgeois Economic Observations")でJ・G・A. Aruliyanaによる論文は、ミッチェルとケインズ(Mitchell and Keynes)を

りあつた。この論文は、科学アカデミー経済研究所(Institute of Economics of the Academy of Sciences)により出版された経済思想史の本の一章として用意された。その論文は、ミッチェルとケインズを平等な立場においているけれど、ミッチェルはよりいっそうの注意と批判を受けた。Arutinyanは、ミッチェルの仕事は資本制生産の循環的運動をとりあつかひ、それに対してケインズは、恐慌を解決しようとする企図である⁽¹⁹⁾、というこの区別をしていた。

ケインズは、ハーバードの経済学者でなかったけれど、Arutinyanは、彼の論文のなかで『一般理論』の簡単な概観をおこなっている。資本主義にとつての問題と危機は、失業であつた。彼の見解では、ケインズは、この問題を解決しようとした。Arutinyanは、消費と投資の両者の増大を強調している『一般理論』における両者の役割を考察し、つぎのようにいっている。

現代の環境の下では、これは、非生産的消費(これから軍国主義と帝国主義戦争の弁護論がでくる)をふやし、社会事業のための組織における投資を深化させ、利率率をゼロにする目的でもつてそれを低下させる、国家の肩にかかっている。⁽²⁰⁾

Arutinyanは、ケインズの理論は、非生産的消費につい

てのマルサスの破産した思想と限界生産力にかんするオーーストリア学派の政治経済学の混合物であると主張した。ケインズの思想は、失業についての沢山のデマゴギーと国家の役割でまっただぶだぶになっている。「この理論は、その弁護論を、現段階の発展における資本の要求に適應させるブルジョア経済科学の数多くの企図の一つである」⁽²¹⁾。

第二次世界大戦にはいると、『一般理論』に対する言及はほとんどまれになつた。『一般理論』に対する公式的な論評は、依然としてなかつた。しかしながら、ケインズに対する言及は、ソヴェート文献にあらわれたけれど、戦争から生じた経済問題についての関係でとりあげられた。ケインズの『戦費調達論』⁽²²⁾(How to Pay for the War)は雑誌で論評を受け、広範な不利なコメントを受けた。ソヴェートは、ケインズをますます意識していったが、この時期のイギリス経済を助けるためのケインズの努力に注目した。

一九三八年に、ケインズは、原料問題について「エコノミック ジャーナル」⁽²³⁾に論文を寄稿した。これは、資本主義諸国の国家の備蓄についての一九四〇年のVishnevの論文の主要な源泉の一つであつた。Vishnevは、この問題につい

て外国文献が弱いことをみつけ、「ドイツの Gaebel 教授と有名なイギリスの経済学者ケインズの業績は注目に値する。

これらの業績のなかには、理論的概念ばかりでなく、あれやこれやの形で実行された、もっと具体的、実的な提案がある⁽²⁴⁾と主張した。Vishnev は、それぞれの計画の類似性を概観し、それから、彼等のあいだの相違に対して思いやりのある強調をした。彼は、とくに、ケインズの計画のいっそうの可能性に注目した。

かくして、Gaebel が注目したのとまったく同じように、ケインズは、貨幣準備、貨幣形態での資源は、戦争という条件の下では、支払いとして容易に容認されないのであらう。自治領や植民地のどこかでなく、イギリス本国の国土に、自然な形態で備蓄することがより安全である。ケインズは、財貨備蓄は金準備より好ましいとさえ考える。同時にケインズの結論は、Gaebel と異なり、ケインズ概念のエッセンスは、国家の備蓄は間接的な資金としてみなされるばかりでなく経済情勢にもついで行動する機動力のある資源とみなされるべきであるということである。国家の備蓄の方向は、ケインズによれば、ブロック化に反対するばかりでなく、また資本主義経済の不安定性と循環に反対するであらう。

さらに、ケインズは、徹底的にこのような備蓄の創出の経済的得策を正当化する。ケインズは、とくに、イギリスの備蓄のための原料と食糧の購入は、これらの購入品が生産される諸国へのイ

ギリスの輸出を刺激するであらうと主張する。さらに、ケインズは、イギリス本土におけるこのような備蓄の出現は、イギリスの海外投資の最良の保障である、と注目している⁽²⁵⁾。

Vishnev は、ケインズの計画に対して何らの重大な反対もしなかった。彼は、ケインズの思想が、「イギリスとアメリカの経済学者のあいだに好意的な反応がある」ことに注目した。実際、Vishnev は、上記の計画を批判することを差しひかえたばかりでなく、ソヴェートの読者にこれらの問題について外国人の経験と技術を研究するようにすすめた。たぶん、必然的な追思惟 (afterthoughts) として、彼は、資本主義諸国の供給と備蓄の立場を理解することにより、人は「帝国主義者の連合」(“imperialist coalition”) と、世界再分割のための闘争を正しく評価することができるであらう。と結論づけた⁽²⁷⁾。

誰もが、そんなに好意的にケインズに対処しなかった。一著述家、A. Grigorev は、資本主義国の労働動員 (labor mobilization) を議論した⁽²⁸⁾。「エロノミック ジャーナル」誌上⁽²⁹⁾にあらわれた Makower と Robinson の論文に対するコメントにおいて、A. Grigorev は、ケインズが編集者であることに注目した。Makower と Robinson は、労働予備軍 (labor reserves) の動員問題を吟味した。彼等の分析では、労

働を分配する市場メカニズムを説明した。Grigorev は二年間のあと知慧の利益のため(with the advantage of two years hindsight)、彼等の誤謬と動員計画を理解することができた。Grigorev は、「実態が、ブルジョア政治経済学の権威的組織である、Royal Economic Societyの雑誌の著者達やケインズが期待していたよりもっと複雑であることを証明した」、と論評を加えた。労働者は、平和時の失業と飢餓、そして戦時の強制労働に賛成しないであろう、と、Grigorev は予測した。

「ヨーロッパにおける五カ月間の戦争のあとに資本主義諸国の労働者階級」(“The Working Class of the Capitalist Countries After Five Months of War in Europe”)という L. Geiler の論文は、戦費を調達するケインズの提案について論及した⁽³²⁾。Geiler は、つぎのような不可解な文章(Mystifying sentence) 以外にケインズの言及に対するいかなる源泉も引用しなかった。「ロンドン市の準公式機関の書き物に、大きな注目を引き、そして、労働者の過少消費を制限する最良の仕方の問題について専心したケインズの論文があらわれた」⁽³²⁾。Geiler は、ケインズは、一〇パーセントの労働者の実質賃金

切下げを欲していたと主張した。配給(Rationing)は非効率的であるから、ケインズは、戦後労働者に返される、強制貯蓄を選択した。労働組合の指導者は、政府との彼等の協調政策により労働者を妥協させた。イギリス共産党は、それが労働者に対してのみむけられているので、ケインズの計画を暴露した。Geilerの意見によれば、ケインズの計画は、成功のチャンスはほとんどなかった。

科学アカデミー会員、ヴァルガは、ケインズの『戦費調達論』を論評し、彼は、つぎのような方法で、ケインズの直面せる諸問題を再説した。「インフレーションをせらし、プロレタリアートの危険な不満を起ささないで、軍隊と戦争の必要を満足さす最良の方法」⁽³³⁾と。プロレタリアートを問題の中に包含することにより、ヴァルガはこの問題に焦点をあて、そして、この角度から、『戦費調達論』を解釈した。ヴァルガの名譽のためにいっておけば、ヴァルガはケインズの計画の本質的部分を理解したが、強力な反労働者の偏倚(a strong anti-worker bias)を見出していた。「その計画の反労働者の性格は、戦争の支出は、いかなる点においても金持によってカバーされえないということを証明しようと、著者が試みてい

る、その章に、もつとも明白にあきらかにされている⁽³⁴⁾と。所得グループについてのケインズの表は、ヴァルガにより再生産されているけれど、これらは、戦前の分類であると述べている脚註は、都合上省略された。ヴァルガは、企業者の刺激的な議論をしりぞけ、金持は戦費を支払うことができると、断固として主張した。

ケインズによるこのすべての立論は、批判にたえることはできない。もちろん、人口中の金持階級は、貨幣形態で戦争の費用をカバーすることができるし、もし彼等の経常所得から完全にカバーすることができないなら、その場合、彼等の資本からどのみちカバーすることができる。いかに、ケインズが労働者にケインズの計画を自発的に受け入れることに確信をもたせようと試みても、ケインズは最大の労働組合の指導者を説得することに成功するかもしれないけれど、ケインズは労働者階級には成功しないであろう⁽³⁵⁾。

労働者は、ケインズの計画を受け入れないであろうというヴァルガの結論にもかかわらず、ヴァルガは、その問題についてイギリスあるいはどのような資本主義国においても戦争の負担を労働者がかぶることを発見した。ヴァルガは、戦争は労働者にとって地獄である、というレーニンからの説明で終った。

同じアプローチが、ケインズのその本の論評で評者のインシャルだけしかサインしていない若干の個人によってなされた。L・F・は、ヴァルガと類似せる仕方、すなわち、反階級的観点(the anti-class point of view)から、簡単な形態でケインズの立場の本質をのべ、それを攻撃しつづけた。L・F・は、ケインズが、彼の計画の最大の支持者としての労働組合の指導者をあてにすることができるといふことを十分知っていた、と指摘し、とくに、戦争終了後まで、資本課税を延期するケインズの思想を批判した。

ケインズの計画の階級的性格は、明確につきぎのように表現される。賃金の一部分は戦争終了後に支払れるであろうが、資本家に対する課税の一部分は戦争終了後まで延期されるであろう。さらに、ケインズは、備蓄のため、経済的な回復があるときのみ以外に、資本課税は戦争終了後すぐに課せられる必然性はないと考える。このように、ケインズは注意深く、一貫して、資本家の利益を擁護する⁽³⁶⁾。

ふたたびケインズの計画は成功のチャンスがあたえられなかった。

他の例が、文献のなかで発見されたが、それらは、内容においてまったく異なっていなかった。⁽³⁷⁾ I. Soszewski は、アメリカ人は、イギリスの政策と類似する政策にしたがっている

ことをみつけ、ケインズの影響にふれた。⁽³⁸⁾ ドイツのソ同盟への侵入とともに、ケインズの計画への言及は停止した。なるほど、多くの出版物が、これらの困難な時期にとぎれたけれども、不規則なスケジュールでさえ出版されつつけられていたこれらの出版物は、戦争のあいだ中、ケインズの計画に対する言及はもはや注意ははらわれなかった。

『戦費調達論』は、かくして、ソヴェートの読者に、曲解されて提示された。実際、ケインズは、彼の計画が労働者の最良の利益を増進すると考えた。ケインズは、彼の本を通じて何回もこの点を強調した。たとえば、

このようなプランにより、私が希望するように、資金と俸給取得者は以前と同じだけ消費することができ、そして加うるに、どちらかといえば、資本家階級に属するであろうところの、後の将来の利益と安全のために銀行に余分な貨幣を所有することができる。⁽³⁹⁾

それは、また、国債の別名である、戦争終了後に遅延された消費に対する権利は、資本家階級の手主に集中されることなしに、直接消費をやめたすべての人々のあいだに広く配分されるであろうことを意味する。⁽⁴⁰⁾

また、さらに、

しかし、我々は、どちらかといえば、企業家に属しているであろう将来の請求権の分け前を労働者にあたえることにより労働者

に報酬をあたえることができる。⁽⁴¹⁾

にもかかわらず、ケインズは、ソヴェートの読者にまったく異なった照明があたえられ、そして、この本はよりいっそうの注目を受け、この点では『一般理論』以上のコメントを受けた。

戦争の終末になると、雑誌が定期的に刊行されはじめた。

依然として、『一般理論』に対する公式の論評はなされなかったが、ケインズに対する言及はなされた。ブレトン・ウッズ会議へのケインズの参加が議論された。ケインズの役割についての指導的な寄稿者は、アカデミー会員、I・A・トラハテンベルグであった。『国際通貨基金と復興開発銀行』(“The International Monetary Fund and the Bank for Reconstruction and Development”)と題する論文において、トラハテンベルグは、この問題についてつぎのような報告をしている。

会議は、二年の連続的な作業によりすすめられた。二つのプロジェクトが出発点において提議された。イギリスの計画はケインズという名前で行われ、アメリカの計画はホワイトという名前で行われていた。両者の計画は、同一の問題そのものの解決のために議論したが、両者は、基本的な一般原則のみならず彼等の目的を達成する方法において相互に異なっていた。両者の計画の異

なる特徴は、イギリスとアメリカ合衆国のあいだの関係における特別な相違と相対立する利害により規定される。⁽⁴²⁾

トラハテンベルグは、アメリカの計画が一般的に受け入れられたと報告した。平価は金あるいはドルにより固定された。

この決定とともに、各種の名目理論が拒否され、金から独立した、規制された資本主義通貨の幻想が放棄された。この問題について、アメリカの観点が完全に勝利し、イギリスの計画の著者である、ケインズにより支持された貨幣数量説である名目説が投げ捨てられた。⁽⁴³⁾

トラハテンベルグは名目説に反対した。しかしながら、彼は、会議へのソヴェートの参加に賛成し、そして、このことがこれらの組織を強化するであろうと、いった。トラハテンベルグは、将来における銀行と基金の卓越せる役割さえ予測した。

「国際通貨協定の計画」⁽⁴⁴⁾ (The Projects of the International Monetary Agreements) という別の論文において、トラハテンベルグは、再度、両者の計画に論評を加えた。トラハテンベルグは、イギリスの将来の貿易上の立場を概観し、彼は、正確に、イギリスが、目にみえない収入での損失の結果としていっそう輸出をふやさなければならないので、将来、イギリスは、貿易上の困難にあうだろうと、予測した。それ故、ト

ラハテンベルグは、借款は必要であり、国際清算同盟に対する、ケインズの計画は、借款を供与するのに役立つであろうと、いった。トラハテンベルグは、この同盟と『貨幣改革論』

におけるケインズの思想と結びつけた。ケインズの貨幣にかんする思想をサマライズした後、トラハテンベルグは、その思想を否定した。「これらの名目理論を不正確さと単純な協定により安定せる通貨を獲得することに對する希望の幻想を証明することはほとんど必要ない」。⁽⁴⁵⁾ トラハテンベルグは、すべてのイギリス人がケインズを支持したわけではないこと、そして、金地金製造関係者 (the gold interests) がとくにケインズに反対したことを注目した。

トラハテンベルグは、一九四六年の初期にでた『戦争の金融的結果』⁽⁴⁶⁾ ("The Financial Results of the War") という本のなかで上記の計画について再びコメントを加えた。彼は、数回、この本のなかでケインズにふれ、第一次世界大戦中の大蔵省での仕事を議論し、大英帝国の前途によこたわる金融的困難の分析をおこなったケインズを賞賛した。ケインズの『貨幣改革論』が長々ととりあげられた。ブレトン・ウッズでのケインズの計画は、それが、上記で言及された論文のな

かで受けた同一の取りあつかいをうけた。「一般理論」は、以上のいかなる諸論文においても言及されなかった。この本の結論において、トラハテンベルグは、資本主義諸国における通貨の困難性の解決の可能性を認めた。この本は、一九四五年の六月に出版社に送られているから、おそらく、この結論は、戦時の協調精神に帰せられることができる。しかしながら、それは、以下のことを読むことを奨励する。

しかし、同時に、あたえられた例は、これらの矛盾にもかかわらず、受容されうる決定が発見されうるということを示している。資本主義世界は安定通貨に関心をもっている。それ故、通貨問題の解決は、われわれの時代において、ファッシズムの思想の配達人である反動的要素の抵抗を克服するという条件で、資本主義という枠組みのなかで可能である。⁽⁴⁷⁾

戦後の早い時期に、ソヴェートの文献において、非常にしばしば、ケインズに対して変わった言及がみられた。P. Maslov 教授は、ケインズが批判的に確率問題を深化させたことを注意した。⁽⁴⁸⁾ 別の批評家である A. Gusakov⁴⁹、F. I. Mikhailovskii の「世界戦争期の金」(Gold in the Period of the World Wars) のなかでの一つの重大な省略としてケインズが欠落していることを発見した。

もし、著者が、ドイツファッシストの金反対のデマゴギーに比較的多くの注意をあたえ、それらに適切な批評を与えているとしても、他の国で例外的に広く分布している、とくにイギリスにおいて名目説的概念の問題がそっとふれられているにすぎないことが観察されるであろう。二〇年代ケインズによりすでに展開された金についてのケインズの観点としてその後、「一般理論」の脚注であたえられている)そして、再びブレトン・ウッズにおける国際通貨会議のイギリス代表により提案された戦後における通貨の安定についての説明と⁽⁴⁹⁾いっそうの展開を加えるならとくに適切なものになったであろう。

「偽りの予言者、ケインズ」⁽⁵⁰⁾ ("The False Prophet Keynes") と称する書評のなかで、科学アカデミー会員、ヴァルガは、E. Mantoux のカルタゴの講和(The Carthaginian Peace) — あるいは、ケインズ氏の経済的諸結果——に論評を加えた。

Mantoux は、ヴェルサイユ条約のケインズの評価に対立するケースを述べたことが、思いおこされるであろう。ヴァルガは Mantoux に反対し、そして、ケインズは、条約に異議を申しはねむことに役立ったが、その崩壊に責任をもつことができなかったということによってケインズを擁護した。この点にかんして、ヴァルガは、Mantoux が少々考えすぎであると考へた。ヴァルガによれば、Mantoux は、

ブルジョア経済学者として、科学的経済学 (scientific economy) と資本主義諸国の経済学とのあいだの現存する相違を理解することができなかったし、あるいは、欲しなかった。

ヴァルガは、ヴェルサイユにしたがうドイツの賠償についてトランスファー問題 (the transfer problem) が存在しなかったし、この問題はケインズにより発明されたという Mantoux の主張に対して Mantoux の責任を問うた。トランスファー問題は、過去に存在したし、また本当に現実にあったということ、ヴァルガは、現在の条件と当該問題を結びつけて、説明した。ヴァルガは、資本主義国にとってこの問題に内在する困難を追跡した。社会主義国では失業は存在しないとヴァルガはつけ加えた。したがって、社会主義国は (例として、ポーランドとユーゴスラビアがあげられている)、自国の経済を害することなしにトランスファーを受けいれることができる。第二次世界大戦後の賠償が再び問題になるであろう。アメリカ合衆国、イギリス、そしてフランスは、財貨を受けとることに反対していた——フランスは石炭をとったけれど——。「彼等自身経常的な生産から工業製品の形態で賠償を利用することはできないが、彼等はソ同盟にこれらの製品を供与す

ることを欲していない」。(51) Mantouxの本は、勇敢で、そして、正直な努力であったが、経済分析について非常に限定されていた、とヴァルガは結論づけた。

上述した例は、ソヴェートによりケインズへの関心が増大しつつあることを証明している。にもかかわらず、『一般理論』に対する公式的な論評は発見されなかった。しかしながら、まもなく、ケインズと『一般理論』をとりあげた数多くの論文があらわれはじめた。とくに、戦争以後ずっと、西欧のブルジョア経済思想について、もっとも多作なソヴェートの権威であると思われる、ブリュエーミン教授は、二年間のあいだにこの問題についていくつかの論文を寄稿した。

これらの最初の論文は、「政治経済学におけるロンドン学派」(52)と名付けられた。当該論文はこの学派の歴史とイギリス経済が直面する問題についての現在の立場に関心もたれているけれど、ブリュエーミンは、ケインズに対してかなり注意をはらっており、ケインズの学派は、戦後のイギリスにおける二つの主要問題——恐慌と失業——について、ロンドン学派と対立するものとして位置づけられている。ブリュエーミンのケインズとその学派のとりあつかいは、以下のようにプリ

ユーミンにより定義されている。

ある学派は、さげがたい不比例が生じる資本主義的競争のメカニズムそのものに組織的欠陥が存在するという基礎から出発する。それは、恐慌の機先を制し、完全雇用を保証するねらいで、一定の貨幣、信用そして産業政策に基礎をおく国家的措置の広範囲なプログラムの基礎のうえで克服される。ケインズ脚はこの学派のもっとも卓越せる鼓吹者でありイデオロギストである。⁽⁵³⁾

他の学派は、ソヴェートが、ロンドン学派と呼ぶところのもので、ソヴェートは、ロンドン学派を、ケインズ派と資本主義を救済するための改良主義的計画に賛成する労働党に対する敵対的な批判者(hostile critics)と考える。ハイエクは、ケインズの立場にたいする厳格な批評家としてとくに選抜された。

この点にかんして、ハイエクの立場は、ケインズの観点と根本的に異なる。というのは、ケインズの観点は、恐慌とのたたかいの基本的な方法は、*「ブーム」*の時期に生産を抑止することではなくて、反対に、産業的拡張を刺激すること、消費需要と投資需要の一般的増加を高水準に人為的に維持することから成立している、ということを提起した。⁽⁵⁴⁾

ブリューミンは、ケインズのいったことが、社会的諸事業に望ましいこととして同時代の多くの人々に影響をおよぼしたことを発見した。

二つの学派のあいだのたたかいは依然として継続したが、

ブルジョア経済学の範囲内でのたたかいであった、とブリューミンはつけ加えた。ケインズは、価格決定に入る一要素としてマーシャルの限界効用説を受け入れた。両学派の目標は資本主義を救済することであった。ケインズは、貨幣賃金率の切下げに反対したが、インフレーションを通じて実質賃金を切下げを除外しなかった。両学派は、社会主義革命(the socialist revolution)とプロレタリアートの独裁(the dictatorship of the proletariat)を非常にきらった(loathed)。実際、彼等のプログラムは、革命の可能性に対して機先を制する(forstalling)ことにおかれ、また、プロレタリアートの「民主主義」(「democracy」)に反対することであった。しかしながら、ブリューミンは、ロンドン学派が二つの学派のうちでより反動的(reactionary)であると考へた。⁽⁵⁵⁾

「イズヴェスチヤ」(Izvestiya)の紙上で、ブリューミンは、「ケインズの経済的教訓」⁽⁵⁶⁾ ("The Economic Teaching of Keynes")と題する論文を書いた。これは、ケインズ死後短かく書かれた。この期間(一九三六年〜四八年)の文献において発見されるケインズについてもっとも完全な説明であった。それは、以下の通り始まっている。

Not long ago (April 21, 1946). Lord John Maynard Keynes died. He was one of the most influential economists in contemporary bourgeois literature. His theoretical works have received a great response in the capitalistic countries. all discussions that presently take place among bourgeois economists have, above all, the marks of Keynes as their basic axis.⁽⁶²⁾

ケインズは、彼が、象牙の塔 (an ivory-tower) のアカデミックな学者でなかったという点に、多数の教授達と顕著者になつてゐることに、ブリューミンは注目している。この点にかんして、ケインズは、大学社会 (university community) とは別にケインズの業績に対して適正な認識が、あたえられた。ブリューミンは、ケインズの経済思想の発展を示すために、『一般理論』出現までケインズの主要な公刊物を年表的にとりあつた。のちに、ブリューミンは、『一般理論』とブルジョア政治経済学に及ぼした『一般理論』の影響を論じた。ブリューミンの意見では、それ以外のケインズの業績は、理論に何もつけ加えなかつたので、ブリューミンは、それらに対してふれなかつた。

一九三六年ケインズの本、『雇用、利子及び貨幣の一般理論』が公刊された。ここで、ケインズは、彼の概念のもつとも体系的な説明を提示した。総需要を刺激する手段により恐慌を防止する必要性について、政府支出の増大について、大量の社会的事業を展開することについて、断片的な仕方、ケインズが以前に示した一連の思想が、この業績のなかで外延的に表現された。それはケインズの文字で書かれた業績のなかで中心的な地位を占めてゐる。その後のケインズの理論経済学の業績は、この業績の基礎の上でける注釈である。『一般理論』は、一経済学者としてケインズの位置 (physiognomy) を規定する。それは、ブルジョア経済科学の歴史におけるケインズの位置を規定する。⁽⁶³⁾

ブリューミンは、この本が非常によく受け入れられ、そして、過去十年間、ブルジョア政治経済学におけるすべての理論的議論の中心になつたことを報告した。『一般理論』は、その旗の下に、「規制された経済」への移行のためのたたかい、ブルジョア経済学者が「計画経済」と呼ぶところの経済に対する管理のためのたたかいを書いたブルジョア政治経済思想の新しい学派的信条 (the gospel) になつた。⁽⁶⁴⁾ ある経済学者はこのすべてを革命的と叙述したけれど、ブリューミンは、ソヴェートの読者に、科学的政治経済学にかんしていうならここにはちつとも革命的なものは何も存在しないと、確信させた。ケインズはブルジョア政治経済学の方法論を使用した。

ケインズは、マーシャルの弟子であった。生産費、資本そして利潤の源泉についてマーシャルの教えを反映していた。ブリューミンによれば、ソヴェートにとって興味あることは、ケインズの見解が、有力なブルジョア社会の見解と考え方の枠を提示したことであった。

ブリューミンは、ケインズの新奇さは、彼が雇用理論を創造しようとしたことであった。このこととともに、出発点として、ブリューミンは、需要不足についてのケインズの主要な前提に対して論評を加えた。ブリューミンの分析では、すべてのケインズ派の概念は、論理的秩序と理解しがたい仕方⁽⁶⁷⁾で提示されている。しかしながら、ブリューミンは、ソヴェートの読者にブリューミンの説明を通じて役に立つ批評を提供した。雇用を増大させる投資に堪して、ケインズが、資本主義の下において、投資の増加は、生産と消費のあいだの矛盾をすくずくするという事実を無視したと、ブリューミンはみる。ブリューミンは、ケインズは、過少消費論者(der consumptionist)の誤謬をくりかえしていると、批判した。すなわち、ケインズは、消費は、ブルジョア社会という条件では、生産にしたがうという事実を無視した。ブリューミン

の意見では、ケインズの教えの基礎的な欠陥は、ケインズがすべての階級にとって単一の需要法則を示したということであった。したがって、ケインズは、労働者にとっての消費の階級的性質(the class nature)と、資本家のそれとが異なっているということ⁽⁶⁸⁾を看過した。ブリューミンは、過少消費説としてケインズには新しい何ものもないことを発見した。この証拠として、ブリューミンは、ホブソン(Hobson)とマルサス(Malthus)を加勢として簡単に導入した。

ブリューミンは、投資需要が、ケインズ体系の心臓であると認識した。ブリューミンは、資本の限界効率と利子率の概念を十分説明した。ブリューミンは、ケインズが、俗流経済学者(a vulgar economist)として、いかに、貨幣と資本投資を分離しているのか、そして、その結果として、企業者(entrepreneur)が、資本家と分離した何者かとしてみなされていることを示した。そして、利潤率が、利子率に等しくなければならぬか、超過しなければならぬから、利子率は非常に重要なものと想定された。「ケインズが利子論にもたらした主要な「新奇さ」は、純粹な「貨幣現象」として利子を定義したことにある」⁽⁶⁹⁾。ブリューミンのこの理論の説明は、読

者に何らの困難をあたえない。ブリュエーミンの当該理論の主体的批判は、ケインズ理論が、利子と資本家の利潤が分離していることであつた。結果として、資本投資は、特殊な資本の形態ではなくなり、資本家の信用は、貨幣を転形するという事実にすぎない。ケインズは、利子率が貨幣数量に依存するというケインズの主張を説明している、貨幣と資本投資とを正しくなく同一視していると告発された。ブリュエーミンは、利子を信頼しないで (discredit)、経済の利益のために利子を規制することが、ケインズの命題に適合していることから、ケインズは、この概念を維持したと感じた。ブリュエーミンは、まったくこの利子概念を否定した。

資本の限界効率について、ブリュエーミンは、ケインズは、利潤の源泉の問題を研究しなかつたと主張した。ブリュエーミンは、ケインズの企業活動の心理学的説明は、現実の表面をとりあつかつており、そして、「それは、すくなくとも、経済恐慌の基本原因を説明することができる」ということを説明しながら、その説明の欠陥を指摘している。ケインズは、また、独占の効果について一言もいわなかつた。

ケインズは、最高の段階にある資本主義のもっとも重要な特徴

カール・B・ターナー『ソヴェートにおけるケインズ批判の変遷』(一)(小野) 八三(二六五)

から独占の法則を抽象することにより現段階のするどくなつてい
る経済的困難を説明しようと試みている。しかしながら、カルテ
ル価格を維持することに興味をもっている、独占資本家の制限的
政策が、経済恐慌をすどくし、また、新しい資本投資の流れを
破壊することにより回復をおくらせる、もっとも重要な諸要因の
一つであることは、明白である。⁽⁶²⁾

ブリュエーミンは、ケインズが経済を規制する方法について
詳細な政策を提供しなかつたことを認めた。この問題は、ケ
インズの追隨者にのこされた。Beveridgeの「自由社会にお
ける完全雇用」(Full Employment in a Free Society)は一例
としてあたえられた。ブリュエーミンは、『一般理論』におけ
る言葉と専門用語の混乱に反対した。特に、異論(exception)
は、社会主義(socialism)、社会化(socialization)そして投資の
社会化(socialization of investment)のような用語の使用と意
味に対してなされた。社会主義についてのミスリーディング
な混乱にもかかわらず、ブリュエーミンは、ケインズのプログ
ラムが、国家資本主義(state capitalism)をいっそう強化する
ものと考えた。

ブリュエーミンは、以下の仕方で「金利生活者の安楽死」と
いうスローガンを説明した。ケインズは、資本主義の金利生

活者の段階は過去のものに追放されるべきであると考えた。多くの人々は、これは革命的であると考えた。どうしてどうして、それは、と、ブリューミンはいいつづける。この安楽死は、小規模な金利生活者のみ適用されて、財界の大立物(financial magnates)に適用されなかった。小さな金利生活者の排除は、支配階級であるブルジョアジーにとって何ら危険とはならなかった。彼等は、小規模な金利生活者の消滅によって、もっと低利の貨幣(cheap money)を利用することができようになるであろう。

ブリューミンは、貨金の切下げが雇用を増大させることができるかどうかの議論についてかなりの注意をはらった。ブリューミンは、ケインズが、貨幣貨金を切下げのではなく、インフレーションの措置を通じて実質貨金を低落さそうとしていたことを認めた。「このなかに、ケインズ理論のかくされた意味がふくまれている」⁽⁶³⁾。貨幣の名目理論が、これがケインズプログラムの重要部分であることを示すために導入された。ブリューミンは、インフレーションが、失業期間中に貨幣の同様な拡大を結果しないというケインズの主張に同意しなかった。さらに、ブリューミンは、ケインズは、イン

フレーションの危険を過少評価し、その過去の歴史を無視している、と、主張した。

ブリューミンの結論的批評として、ブリューミンは、ケインズが、自分自身とブルジョアジーの利己的な利益とを同一視したことから、恐慌の科学的な説明への真の道を見つげることができない、この時期の典型的なブルジョア・イデオロギストと判定した。ブリューミンは、ケインズの中心思想の一つは、現代資本主義は、自由放任と自動的な経済諸力の作用の古い道にそって発展することはできないということ、そして、特別な措置が現代資本主義を救済するためにとられなければならないということであった。ブリューミンによれば、ブルジョアジーは、ケインズの教義のなかに、社会主義的デモクラシーのラディカルな計画に反対する解毒剤(antidote)とよこしまなボルンエウイキの計画に対する最後の要さし(The Last Bastion)をみた。「資本主義を救済するべきケインズの計画は、空想的な性格をもつ。それは空想的任務——資本家階級の基礎を保護することを目的として恐慌と失業とたたかうこと——」⁽⁶⁴⁾。資本主義を「規制する」ことにかんするケインズの提案について、これらの効果は無視されるであ

ろう。ブリュエーミンは、この点を証明するためにスターリンを引用した。そして、この「権威ある」説明をもって、ブリュエーミンは、彼の論評を終った。

これが、『一般理論』の最初の完全なる批評であつた。ブリュエーミンは、マルクスの書き入れ(interpolations)を酌量しながら、彼は、理論を説明するのに非常にりっぱな仕事(stable job)をなし、かつ、若干のむつかしい概念に対するブリュエーミンの説明は非常に明確であつた。ブリュエーミンの批判は、ケインズの主題の順序だつた発展に干渉しなかつた。しかし、われわれは、それから、ケインズ思想の本質の一般的思想を得ることができるのである。とくにケインズの先行者あるいは追隨者あるいは敵対者さえある他の経済学者への多くの言及は、役に立つであらう。この論文は、方程式、グラフ、図表あるいは統計を含んでいない。この論評は、なが

いあいだ刊行されなかつたけれど、一九四六年のブリュエーミンの努力は、今日まで彼の仲間を育てるのに役立つた (went a long way)。

翌年、ケインズが、ふたたび、ブリュエーミン教授の論文の主題になつた。「ケインズ——規制された資本主義」の予

カール・B・ターナー『ソヴェートにおけるケインズ批判の変遷』(一)(小野) 八五 (二六七)

言者」⁶⁵。この論文は、以前に議論された二つの論文、その一つは、ロンドン学派についてのそれ、そうしてもう一つは、ケインズの教訓についてのそれを大きく結合したものである。実際、バラグラフとバラグラフのあいだは、何らの変更もなしに、この論文に転形されている。

ブリュエーミンは、条件的に、ケインズ学派が存在していることを認めた。この修正は、まず、ケインズの観点の安定性にとつて彼自身決して替れが高くなかつた、それ故、ケインズの仕事のなかに一定の矛盾があつた、とブリュエーミンがいふように、ケインズ自身によるものであつた。第二に、いろいろのもつとも多くの社会グループがケインズの利用しようを試みたという事実によつた。

これらの異なつた社会グループのあいだで、ブリュエーミンは、戦前のドイツにおける社会グループを含めた。ブリュエーミンは、ケインズ思想が、ヒットラーの経済学雑誌、Der Deutsche Volkswirt. 及 Die Deutsche Volkswirtschaft の頁のなかに、非常に好意的な歓迎(very favorable welcome)を受けた、と主張した。完全雇用にかんするケインズ思想は、ドイツにおいて実現されたということを証明している

Guilebaud の「ドイツの経済復興」(The Economic Recovery of Germany)に言及した。ブリュネーミンは、一九三六年、四月一日のロンドンエコノミストでの上記の問題についてのケインズの立場の擁護を思ひだした。ブリュネーミンは、また、ケインズと Schacht 博士との類似せる観点を論述した一九四六年、八月一五日の The Commercial and Financial Chronicle で発行された、ケインズと Philip Cortney のあいだの書簡に言及した。ケインズは自分の観点を説明することを約束したけれど、ケインズの突然の死はそうすることをさまたげた。ブリュネーミンはつぎのようにつけ加えた。「ケインズは、プロファシスト(Munich)の時代、ケインズは Neville Chamberlain に反対する立場にたっていた)でなかったけれど、ケインズ自身は、彼の経済理論は、その結論において適度に保守的であることを認めなかったことを注目しておくことは必要である」⁽⁶⁶⁾。

反対の極において、改良主義者のあいだで、とくに、労働運動の指導者のあいだで、ケインズ思想が広範な普及をみた。ブリュネーミンは、何故、このような異なるグループがケインズに追随するのかという問題に答えて、つぎのように説明し

た。資本主義の世界は、失業と恐慌の危険に直面している。このような困難から脱出するためには、管理された経済、規制された経済、あるいは計画された経済として知られている思想と手段にたよった。ブリュネーミンは、ケインズを、国家資本主義(State Capitalism)を強化するこれらグループの主要な理論家とみなした。ケインズは仰天するほど成功した。これは、ブルジョアジーが、何故、資本主義の救済を宣言する新しい予言者として、ケインズを歓迎したかを証明した。

当該論文は、ブリュネーミンの以前の論文のなかでみいだされる大部分の材料をくりかえした。しかしながら、いくつかの進歩のあとがみられる。それは、貯蓄についての過少消費論者とケインズのあいだの差異である。過少消費論者は、貯蓄は投資をみつけたすことを受け入れ、そして過大な貯蓄は過大な投資を生みだすという危険を理解した。これは、経済に重大な不比例をつくりだし、したがって、消費を攪乱する。ケインズは、他方、貯蓄の増加は、投資の増加あるいは消費の増加かのいずれも必然的に結果しないだろうと考えた。

この論文は、また、合衆国にかんして長期停滞の命題(cyclical stagnation thesis)にたいしてより十分なりあつかい

をした。ブリュエーミンは、長期停滞論者についての誤解に反対した。「停滞理論は、ブルジョア経済学者のあいだでの一つの宿命論的な傾向 (Fatalistic disposition) という結論をあたえていると考えるのは正しくないであろう。反対に、この理論の支持者は、資本主義を救済することに関心をもつすべての人々を動員する役割をはたさなければならぬ」と強調することをしばしば意図している」⁽⁶⁷⁾。

ブリュエーミンは、『一般理論』における四つの有機的な欠点をリストにした。第一に、歴史的観点 (Historical viewpoint) がなかった。この点について、ブリュエーミンは、ケインズの失業についての誤まった見方は、失業を資本主義社会の特有の現象としてでなくて、永遠の問題として考えていることであるととした。第二は、ケインズは、資本主義の再生産のメカニズムをあやまって提起し、第二義的な特徴に集中した。第三に、ケインズの分析は、静態的条件と技術不変を想定した。最後に、ケインズは、独占の失業に及ぼす有害な効果を考察することを拒否した。

ブリュエーミンは、合衆国と大英帝国におけるケインズの影響を認識し、また、英国においてケインズの影響が非常に大

きいことをみいだした。英国では、ケインズの影響は、帝国 (the Empire) をささえるために利用されつつあった。この政策のねらいの一つは、合衆国への経済的依存を弱めること、そして、帝国を合衆国における恐慌の有害な影響から隔離することであった。ブリュエーミンは、結果として、ケインズに、三つの明確な階級の特徴があることを発見した。「第一に、ケインズは、イギリス資本主義の特殊な利益を反映している。第二に、ケインズは、独占資本のイデオロギストとしてあらわれている。第三に、ケインズは、資本主義の全般的危機の時代における典型的なブルジョアイデオロギストである」⁽⁶⁸⁾。ブリュエーミンは、『一般理論』は、その任務を達成しないであらうと結論づけて、この論文をしめくくるために Zhdanov を引用した。

Zhdanov の論文は、ブリュエーミンの以前のそれと類似しているけれど、それは、ケインズに対してより敵対的であった。冷戦は、その支持者をきびしくかつがんこな態度にさせていきはじめた。ケインズの実想は、明確な政治的背景の下におかれた。ソヴェートの読者は、この教義の階級的な性格について何の疑いもなく、受け入れた。

他のソヴェートの経済学者は、ブリュエミンの指導にしがった。N. Lyubimov 教授の論文、「ケインズの経済理論の若干の問題」⁽⁶⁸⁾は、その一例である。『一般理論』をのちにロシア語に訳出したのは、Lyubimov 教授であったことから、

報酬である利子について正統的な見解をかえたという事実を強調した。

Lyubimov の説明はとくに興味深い。この論文で Lyubimov 教授は、ブリュエミンがやったのとまったく同一の仕方の説明した。ケインズの生涯と出版物が、ブルジョア経済学文献において、「ケインズ派のバイブル」と呼ばれる『一般理論』出現まで簡単に論評された。ケインズ概念の Lyubimov の説明は、あまり明確でなかった。彼は、完全雇用がケインズの主要なねらいであると考えた。彼は、失業が、偶然的な来客でなくて、経済の「不断の旅は道づれ」(“constant fellow traveler”)であることを認識したことに對してケインズを信用した。国家は、財政金融政策により完全雇用を達成することに役立たなければならなかった。遊休資金の所有者の反社会的性格、国家は、低金利の貨幣問題でこのような人々と格闘しなければならぬ事実について言及した。Lyubimov は、ケインズが、貯蓄について、同じように消費をおくらすことに対する報酬ではもはやなくて、流動性を手離すことに對す

Lyubimov は、ケインズには、私有財産の平等化の措置 (property equalization measures) はないことをみた。独占について、ケインズは、大資本がすでに關係のポストに滲透し、

また、官僚的指導者といっしょに参画していることに言及することに失敗した。Lyubimov の分析によれば、低金利の貨幣は、より大きな債務、したがってよりいっそうの課税を意味した。労働者は、重荷にたえしのばなければならぬであろう。このような政策は、彼等のねらいを達成しないであろう。何故なら、彼等は以前にも試みて、失敗したことがあった。その計画は、科学的基礎をもたなかった。

「ケインズは、病氣にかかった資本主義体制に対する、医者」の役割において登場した……そして、ケインズの政治的、文筆的な経歴の出発から彼の生涯の終りまで、資本主義体制の信頼された剣の使者 (sword-bearer) であったし、それにとどまった」⁽⁶⁹⁾と Lyubimov は認識した。この論文はケインズのボルシエヴィズムの「かたわな、狂暴な、残忍な」描写に對するレーニンの言及でもって終った。Lyubimov は、ケイ

ンズに対する論ばかりにおいて、彼は、『一般理論』に対して一頁も言及しなかった。

科学アカデミー会員 I. A. Trakhtenberg は、「資本制の再生産と経済恐慌」(“Capitalist Reproduction and Economic Crises”)において、『一般理論』の説明を加えた。トラハテンベルグの説明は、一般理論のテキストにおいて、ケインズの業績を最初にとりあげたように思われる。トラハテンベルグは、恐慌理論を年表的に展開した。まず、彼は、マルクスの先行者、すなわち、ケネー、スミス、リカード、J・S・ミル、セイそしてシスモンディをとりあげた。それから、特別な注意がマルクスにはらわれた。最後に、レーニンとスターリンをとりあつかった。恐慌理論に対する最新の貢献であると考えられる、スターリンの業績のところでは、トラハテンベルグは、恐慌が資本制的生産様式により生じるのではなくて、排除されうるができる偶然的な環境により生ずると主張するブルジョア政治経済学の最新の代表的な業績として『一般理論』を導入した。「これらの見解のもっとも完全な基礎は、『一般理論』において展開されたケインズ理論によりあたえられた……この理論は、もっとも広範囲な議論を

換起しそしてブルジョア経済思想に大きな影響をおよぼした。現在、ケインズは、ブルジョア政治経済学に承認された指導者である」⁽²²⁾

トラハテンベルグは、ケインズが、失業の原因として不十分な支出であるとしたことに注目した。古い諸理論が、「人々が所得不足の結果として消費が過少になるという前提から出発し、そして、弁護論的な現代のブルジョア理論は、所得は十分だが、人々には所得を支出する傾向がないという前提から出発する」⁽²³⁾、という本質的差異をもつ以外に、過少消費説の疑似性がここにある。トラハテンベルグは、ケインズの所得分配についての提案は、一見して革命的にみえるけれど、実際には、不十分な結果しか生みださないと考えた。トラハテンベルグは、ケインズ概念を説明したあと、それらをさっさとかたづけしてしまった。「ケインズと彼の追隨者の理論の基本的な欠陥は……彼等は、交換の領域と需要の大きさと性格のなかに恐慌の理由をさがしていることである。しかしながら、需要の大きさと性格は生産関係により規定される」⁽²⁴⁾

多くの計画は、完全雇用を実現するために西欧において、

いろいろの学者、組織そして政府機関により最近作成されてきた。トラハテンベルグは、これらの大部分は、ケインズ思想に基礎をおいていると主張した。「ブルジョア経済学者は、あきらかに、ケインズの方法をマルクスのそれより還好する」⁽⁷⁶⁾。トラハテンベルグは、不自然でなく、マルクスを選択し、マルクス主義への貢献としてスターリンに対して適正な認識をあたえた。トラハテンベルグは、ケインズに対してかなり公平 (reasonably fair) であり、軍国主義あるいは帝国主義的政策の推進者としてとくにケインズを批判しなかった。

トラハテンベルグは、『一般理論』に固守し、彼は、その内容の非常に簡単でしかも明解なサマリーをおこなった。

ケインズをとりあげた上記の諸業績は、『一般理論』は、実際独創的な業績ではないということをしぼしばコメントした。例として、ケインズの先行者の学説のケインズへの影響を示すことであたえられるであろう。このことは、「ブルジョア政治経済学におけるマーカントリズムと新マーカントリズムに ついて」⁽⁷⁸⁾ (On Mercantilism and Neo-mercantilism in Bourgeois Political Economy) という M. V. Kolganov の論文についてとくに真であった。Kolganov は、マーカントリズムが計画

経済をとりあつかう仕事のなかで再評価され、再建されたと主張し、議論のために『一般理論』をえりすぐった。「ケインズは、マーカントリストの知慧を、マーカントリストが意識的に、当該国内で貨幣準備を保有することにより利率を引下げることには味方した点にありと理解している」⁽⁷⁷⁾。ケインズの見解では、マーカントリストは、利率を自己規制する思想を受けいれず、高い利率は、富の増大にとって主要なる障害であるとさえ主張した。Kolganov はケインズに反対した。「国民生産のより大きな部分が依然として封建的形態にあるとき、どのような方法で、利率率が、一六世紀、一七世紀において、資本の運動、生産、そして雇用を規制することができたのか」⁽⁷⁸⁾。Kolganov は、ケインズ自身が、マーカントリストは一般的な雇用理論の発見者であると指摘するとき、ケインズ理論の新奇さについて興奮してまったくいふがかった。

ブリュエミン教授によるもう一つの論文、「ホブソンの社会経済思想」⁽⁷⁹⁾ (The Social-Economic Ideas of Hobson) は、『一般理論』におけるケインズによるホブソンの復位 (rehabilitation) をとりあつかっている。ブリュエミンの評価によれば、

ケインズは、ホブソンの理論を『一般理論』に連結させて、ケインズは、彼の学問的利益のためにホブソンを推薦をせした。ホブソンの所得の多少の平等化に対する要求は注目されないままになったが、ケインズによる同じような考察は、嵐のような成功にあつたので、運命は、ケインズにとって親切であつた、とブリュームミンは観察した。ブリュームミンは、イギリスの労働党はケインズの観点に影響を受けたことをみつめた。『ホブソンの思想の結果と同じように労働運動におけるケインズ思想の影響の強化のこの過程は、まったく労働党員の一方向の顕著なる徴候である』⁽⁸²⁾

この期間中に、西欧における経済学者や政府の政策にケインズの影響がまじつたことを認識した諸論稿があらわれはじめた。たとえば、I. Kuzminov による「豊富な時代における経済的貧困」⁽⁸²⁾ ("Economic Poverty in the Age of Plenty") は、Stuart Chase の「アメリカの目標」(Goals for America)の論評であり、資本主義の下での恐慌と失業をとりあつた。Chaseの本は、資本主義の現実を説明し、それを正当化する希みなき試みとして批判された。「この種の最初の企図の一つは、イギリスの有名な経済学者ケインズの本、

『一般理論』である……Chaseの本は、疑いもなくケインズの影響の下に執筆された」⁽⁸²⁾。Kuzminov はまた H. Norman Smith の「豊富の政治学」⁽⁸²⁾ (The Politics of Plenty) を論評し、Chase に及ぼしたケインズの影響を回想しながら、「現在我々は逆の状況——もうろうとしたアルビオン (Albion, イギリスのこと…小野) の若干の理論家に及ぼしたアメリカのChange の影響——を評価しなければならない」⁽⁸⁴⁾ と彼はコメントをつけ加えた。

G. M. Movshovich の論文「アメリカの経済学者の戦後第一回目の会議」⁽⁸⁵⁾ ("The First Postwar Meeting of the American Economists") ——アメリカ経済学会の第五八回年次総会の諸論文と議事録の説明である——を再吟味することは興味がある。Movshovich は、圧倒的多数の経済学者が第二次世界大戦後の経済的困難を確認したが、問題の核心を得ることができなかった、と報告している。「救済の手段のための共通の根拠を発見しようとする彼等の企図においては、彼の観点はまず当然ケインズにかえる」⁽⁸⁶⁾。Movshovich は「ケインズがアダム・スミスになぞられているのをみつめた。この中には若干の真理がある。何故なら、スミスがちやうど

なしたようにケインズは、ケインズの時代のブルジョアジーを獲得したからである。相違は、現在では、資本主義が全般的危機にあるということである。完全雇用計画のとりあつかいにおいて、Movshovichはつきぎのことを注目した。「現代資本主義のもっとも大きなただれ(share)——大量の失業——を現存の経済システムの枠組の中で存在するあれやこれやの手段により取り除こうとする企図は、びったりと、ケインズの理論的概念と結びついている」⁽⁸⁷⁾。

M. Smit⁽⁸⁸⁾ 女流の経済学者は、「恐慌なしの資本主義を求めて」という論文の中で、「一般理論」とその影響について論じた。戦争末期にあらわれた計画とプロジェクトのいくらかをコメントしながら、彼女は、失業が最大の問題であると考えた。彼女は、この問題は、マルクスを通じてかケインズを通じてかのいづれかにより解決することができるという意味で Amle⁽⁸⁹⁾ を引用した。彼女は、それから、「一般理論」による著名なる「革命」について論じた。「最初、その本は大きな関心をおこさなかったが、戦争中に、それは、一応、転形された、資本主義の教義(gospel)になった……」自由社会における完全雇用」(Full Employment in a Free Socie-

ty-1945)の Beveridgeは、ケインズの『一般理論』の刊行で、新しい時代に入ったという⁽⁸⁶⁾。Smitはケインズ理論を検討し、ケインズが、数多くの問題で沈黙し、そして多分、彼の成功は、沈黙によっていることをみつけた。Smitの西欧の経済学者の決定的に限定された知識は、Seymour and Harris as Joint authors, together with Hansen, of a series of articles in the New Republic」に引く彼の女の論文に言及すれば明白である⁽⁸⁷⁾。

I. Leminのサーベイ「帝國主義反動に奉仕する労働組合主義のイデオロギーと政策」(「Ideology and Policy of Laborism in the Service of Imperialist Reaction」)は、イギリスの右翼労働組合の指導者が、帝國主義陣営と民主陣営のあいだの国際的闘争において反動的地位に位置していることをみつけた。Leminは、彼等は、労働者をあざむく日和見主義者であると考えた。経済政策において、彼等は、ケインズにしたがった。「イギリス労働党はケインズ理論をその経済的信条にした。右翼の労働党員は自分達自身をケインズの弟子と呼び、そして、疑いのない権威としてケインズに言及している。特別な熱心さで、彼等は、資本主義の下で計画経済

の可能性についてケインズの主張をくりかえしている。⁽⁸⁴⁾

上述したことから、ソヴェートの読者が、容易にイギリスにおよぼしたケインズの影響を認識したことは明白である。

ターナー准教授は、この期間の検討を終るにあたって、ケインズのアメリカ合衆国への影響に強調点を移している。ケインズとアメリカの政策との関係に対して「さうの注意がはられる。「アメリカ資本の教養ある従僕」⁽⁸⁵⁾ ("The Learned Servants of American Capital") という A. Aizenshdadt の論文は、早く時期の一例である。

Aizenshdadt は、アメリカにおいて資本主義が非常に困難におちいつていると考えた。彼は、自分の見地を弁護するたると Higgins, Henderson, Hansen, Harris 等々の業績に論評を加えた。American Economic Association の Readings in Business Cycles Theory は、資本主義の危機について議論をまとめようと努力する代表的なものともみなされる諸業績の一つである。Aizenshdadt の意見では、上記の論文集のすべての寄稿者は、ケインズ派であり、Alvin Hansen は、アメリカにおけるケインズ派の認められた指導者である。『一般理論』は、投資用の資金を供給するため自分の消費性

カール・B・ターナー『ソヴェートにおけるケインズ批判の変遷』(一)(小野) 九三 (二七五)

向を切下げなければならぬ。労働者を搾取するための新しい方法を提供した。⁽⁸⁶⁾ブルジョア経済学者は、しかしながら、本質的な諸政策で恐慌をストップさせるのではなくて、独占資本と帝国主義にたよった。著名な、トルーマン・ドクトリンとマーシャル・プランは、アメリカの経済学者の諸理論と同じように、帝国主義的拡大の発展の証拠である。⁽⁸⁷⁾

L. Alter は、ブルジョア経済思想の現在の立場のみならず、アメリカ経済思想の過去の傾向を論じた。『The Theoretical Swordbearers of American Imperialism』⁽⁸⁸⁾ において同じテーマでとりあつかった。アメリカの経済学者には、帝国主義と労働者の生活水準の切下げを支持していることが判明した。Alter は、ケインズ理論が、後者の目的のために広範に利用されていると考えた。そして、Alter は、『一般理論』のドイツ語版の序文で、ケインズが、彼の理論は、全体主義国家 (totalitarian state) の条件にもっとも容易に採用されると書いたことを引用して、この理論の政治的方向に言及した。⁽⁸⁹⁾

ブリュニン教授は、『一般理論』のロシア語訳の出版前にちように書いた、「独占に奉仕するアメリカの経済学者」⁽⁹⁰⁾

〔“American Economists in the Service of Monopolies”〕でこの主題についてソヴェートの立場を概括した。要するに、ブリュミンは、合衆国が、その工業能力を充分利用できず、多くの経済学者(Ayres, Lorwin, Hansen)が、この矛盾を解決するための諸提案をおこなった、と分析した。「これらの数多くの、しかも、同時に、資本主義を、いやす、(healing)成果のないプロジェクトの吹聴者は、規制資本主義、の流行の予言者、そして、資本主義の全般的危機の時代の典型的なブルジョア・イデオロギストである、イギリスの経済学者ケインズであった」⁽⁹¹⁾。また、「ケインズが創造した、反恐慌政策の思想は、我々の時代に、アメリカ政府の経済政策を決定するさいに、まったく重要な役割をはたしている」⁽⁹²⁾。

ブリュミンは、アメリカにおけるケインズの追従者の攻撃性は、戦争の介在により、合衆国における資本主義的民主主義の雇用政策の成功あるいは失敗は評価することができないと観察したケインズの論文のせいにして⁽⁹³⁾いる。ブリュミンの意見では、ケインズのアメリカにおける追従者は、需要をふやし、失業問題を解決するために戦争を実際に利用した、と。「この思想は、ケインズのアメリカの追従者により上手

に修得された。恐慌に対する『安全弁』(safety valves)としての戦争準備の利用は、しばしばかくされているけれど現在、反動的なアメリカの新聞によりあおられている戦争心理に対する基本的な動機の一つである」⁽⁹⁴⁾。この安全弁は、需要を増大さすかもしれないけれども、また、それは、資本主義をよりいっそう破壊に導くであろう、とブリュミンは結論づけた。

『一般理論』の英語版の刊行の日から、始めて『一般理論』のロシア語訳がでた一九四八年までのソヴェートの経済学者による上記の諸論文と諸業績の分析は、ソヴェートが、ケインズの主要業績の意義を認識するのにおそかったということを示している。しかしながら、西欧の同僚がそれを経済学の討論の焦点にすると、ソヴェートは、資本主義国の経済思想の発展についてもはやその影響を無視することはできなかった。ケインズ、とくに『一般理論』に対するソヴェートによる関心の増大は、ケインズと彼の影響の検討に部分的あるいは全体的に専心する大出水のような論文と著作が生みだされた。最初、ソヴェートは、カッセル、ウイクセル、ミツチエールと同じような水準でケインズに言及した。それから、ソヴ

エートは、ケインズ思想の追隨者を経済学の一学派として位置づけ、そして、ロンドン学派やハーバード学派のような他の学派との比較においてそれが検討された。最後に、ソヴェートの見解では、ケインズ学派が勝利して、ブルジョア政治経済学における卓越せる学派になった。

『一般理論』を認識することにソヴェートの経済学者がぐずぐずしているのは数多くの要因によって説明することができる。『一般理論』は、西欧において即座に成功しなかった。戦前、ソヴェートは、工業計画や政治的肅清 (political purges) を含む国内問題に非常に忙しかった。後者は、知的客観性と知的努力に対して決定的な効果をもった。それから、戦争ともなう混乱がやってきて、あらゆる努力は、国防に集中された。最後に、戦争終結とともに、ソヴェートは、当時の西欧の経済発展を知るべき時間ができ、ケインズ思想が支配的になっていることをみいだした。ブリュニン⁽⁹⁵⁾は、「我々はいまやすべてケインズ派である」という有名な言葉に注目し、引用させた。大英帝国や合衆国における経済政策におけるケインズ思想の結果として、ソヴェートは、もはや『一般理論』を無視することができず、その意味を考察せざるを得ない。

カール・B・ターナー『ソヴェートにおけるケインズ批判の変遷』(一)(小野) 九五 (二七七)

えなくなつた。

冷戦の出現は、『一般理論』をして、ソヴェートによってよりするどい焦点にせしめた。彼等は、ケインズ思想を帝国主義的侵略の基礎を提供するものとみた。ブルジョア経済学者、ケインズは、いまだでは、独占資本主義のイデオロギストになった。結果として、『一般理論』が、ソヴェートが西欧の立場を評価するさいにより重要となった。このとき、『一般理論』のロシア語への翻訳がおそらく決定されたのである。

(1) ここで使用されている材料は、主に、『ホルシエビツ』、『計画経済』、『経済学の諸問題』、『世界経済と世界政治』等の雑誌である。

(2) セイモア・E・ハリス編、日本銀行調査局訳『新しい経済学』I、(東洋経済新報社) 四四一ページ。

(3) Alvin Johnson, "The Economist in a World in Transition", *American Economic Review*, XXVII (March, 1937), p. 3.

(4) E. Varga, "Koneis Zolotogo bloka i valyutnaya problema v period obshchego krizisa", *Mirovoe Khozjastvo i Mirovaya Politika*, 1936, No. 11, p. 30.

(5) Z. Atlas, review of S. Vygodskii, *Kredit i kreditnaya politika v SShA* (Moskva, 1936), 『計画経済』所収。

- 1937, No. 2, p. 173.
- (6) E. Varga, ed., *Mirovae Khozyaistvo 1936g* (Moskva, 1937), p. 218.
- (7) E. Varga, "Ekonomicheskie krizis v SSHA predvestnik novogo mirovogo ekonomicheskogo krizisa." *Mirovoe Khozyaistvo i Mirovaya Politika*, 1938, No. 1, p. 11.
- (8) L. Freiman, "Bezrabotitsa v Kapitalisticheskikh," *「土國雜誌」* 1938, No. 8, p. 107.
- (9) *Ibid.*
- (10) *Ibid.*, p. 108.
- (11) P. Polyak, "Ekonomicheski Krizis. V Anglii." *「土國雜誌」* 1938, No. 9, p. 133.
- (12) S. Goldin, review of Jurgen Kuczynski, *New Fashions in Wage Theory* (London, 1937), *「土國雜誌」* 1938, No. 12, pp. 182-184.
- (13) *Ibid.*, p. 183.
- (14) Keynes, *The General Theory*, pp. 270-271.
- (15) Goldin, p. 184.
- (16) I. Blyumin, review of Erich Roll, *A History of Economic Thought* (London, 1938), *「雜誌」* 1939, No. 5, pp. 203-206.
- (17) *Ibid.*, p. 204.
- (18) A. Arutinyan, "Garvardskie ekonomisty i burzhuaznoe konyunkturovedenie," *「雜誌」* 1940, No. 9, pp. 151-165.
- (19) *Ibid.*, p. 151.
- (20) *Ibid.*, p. 165.
- (21) *Ibid.*
- (22) London, 1940
- (23) J. M. Keynes, "The Policy of Government Storage of Foodstuffs and Raw Materials," *The Economic Journal*, XLVIII (Sept., 1938), 449~460.
- (24) S. Vishnev, "Gosudarstvennye rezervy v kapitalisticheskikh stranakh," *「土國雜誌」* 1940, No. 10, p. 86.
- (25) *Ibid.*, p. 87.
- (26) *Ibid.*, p. 88.
- (27) *Ibid.*, p. 94.
- (28) A. Grigorev, "Voyna i mobilizatsiya truda V stranakh kapitala," *「土國雜誌」* 1941, No. 1, pp. 64-78.
- (29) Makower and H. W. Robinson, "Labour Potential in War-Time," *The Economic Journal*, XLIX (Dec., 1939), 624-640.
- (30) Grigorev, p. 66.
- (31) L. Geller, "Rabochii klass Kapitalisticheskikh stran posle pyati mesyatshev voyny V Evrope," *「土國雜誌」* 1940, No. 1, pp. 61-80.
- (32) *Ibid.*, p. 70.
- (33) E. Varga, review of J. M. Keynes, *How to Pay for the War* (London, 1940), *「土國雜誌」* 1940,

- No. 6, p. 200.
- (31) Ibid., p. 201.
- (32) Ibid., p. 202.
- (33) L. F., review of J. M. Keynes, How to pay for the War (London, 1940), 『雑誌評論』1940, No. 9, p. 173.
- (34) For example, S. Lang, "Ekononicheskoe polozenie Anglii," 『経済雑誌』1941, No. 5, pp. 14-26.
- (35) I. Sosenskiĭ, review of John A. Krout, ed., the Effect of the War on Americas Idle Men and Money (New York, 1940), 『経済雑誌』1940, No. 10, pp. 134-135.
- (36) Keynes, How to Pay for the War, p. 5.
- (37) Ibid., pp. 10-11.
- (38) Ibid., p. 74.
- (39) I. A. Trakhtenberg, "Mezhdunarodnyi valyatrnyi fond i bank dlya rekonstruktsii i razvitiya," 『土曜雑誌』1944, No. 2, p. 69.
- (40) Ibid., p. 72.
- (41) I. A. Trakhtenberg, "Proekty mezhdunarodnykh valyutnykh soglashenii," 『経済雑誌』1944, Nos. 1-2, pp. 25-40.
- (42) Ibid., p. 31.
- (43) Finansovye itogi voiny (Moskva, 1946).
- (44) Ibid., p. 102.

- (45) P. P. Maslov, review of Academician V. S. Nemchinov, Seikhozaistvennaya statistika s osnovami obshchei teorii (Moskva, 1945), Izvestiya Akademii Nauk SSSR, Otdelenie Ekonomiki i Prava, 1946, No. p. 262.
- (46) A. Gusakov, review of F. I. Mikhailovskii Zoloto V period mirovykh voĭn (Moskva, 1945), Izvestiya Akademii Nauk SSSR, Otdelenie Ekonomiki i Prava, 1946, No. 2, p. 174.
- (47) E. Varga, "Lzheprorok Keins," 『経済雑誌』1947, No. 7, pp. 92-94.
- (48) Ibid., p. 94.
- (49) I. G. Blyumin, "Londonskaya shkola V. politicheskoi ekonomii," Izvestiya Akademii Nauk SSSR, Otdelenie Ekonomiki i Prava, 1946, No. 3, pp. 217-230.
- (50) Ibid., p. 218.
- (51) Ibid., p. 229.
- (52) Ibid., p. 230.
- (53) I. G. Blyumin, "Ekononicheskoe uchenie Keinsa," Izvestiya Akademii Nauk SSSR, Otdelenie Ekonomiki i Prava, 1946, No. 4, pp. 301-319.
- (54) Ibid., p. 301.
- (55) Ibid., p. 303.
- (56) Ibid., p. 303.
- (57) Ibid., p. 308.
- (58) Ibid., p. 312.

- (32) Ibid., p. 313.
- (33) Ibid., p. 316.
- (34) Ibid., p. 319.
- (35) I. G. Blyumin, "Keins-prorok reguliruemogo kapitalizma," *Vestnik Moskovskogo Universiteta*, 1947, No. 4, pp. 43-66.
- (36) Ibid., p. 44, Here Blyumin cited The General Theory, p. 377.
- (37) Ibid., p. 56.
- (38) Ibid., p. 65.
- (39) N. Lyubimov, "Nekotorye problemy ekonomicheskoi teorii Keinsa," *Sovetskia Finansy*, 1947, No. 5, pp. 42-48.
- (40) Ibid., p. 48.
- (41) I. A. Trakhtenberg, *Kapitalisticheskoe proizvodstvo i ekonomicheskie krizisy* (Leningrad, 1947).
- (42) Ibid., p. 108.
- (43) Ibid., pp. 109-110.
- (44) Ibid., p. 112.
- (45) Ibid., p. 116.
- (46) M. V. Kolganov, "O merkantilizme i neomerkantilizme V burzhuaznoi po licheskoi ekonomii," *Izvestiya Akademii Nauk SSSR, Otdelenie Ekonomiki i Prava*, 1947, No. 6, pp. 411-428.
- (47) Ibid., p. 426.
- (48) Ibid., p. 426.
- (49) I. G. Blyumin, "Sotsialno-ekonomicheskie vozzreniya Gobsona," *Izvestiya Akademii Nauk SSSR, Otdelenie Ekonomiki i Prava*, 1947, No. 4, pp. 265-277.
- (50) Ibid., p. 277.
- (51) I. Kuzminov, "Economika nishchety v 'vek izobil'ya'," *Госэкономизм* 1946, No. 5, pp. 60-73.
- (52) Ibid., p. 64.
- (53) I. Kuzminov, "Economika nishchety i politika izobilya'," *Госэкономизм* 1946, Nos. 7-8, pp. 76-88.
- (54) Ibid., p. 76.
- (55) G. M. Movshovich, "Pervyi poslevoennyi sezd amerikanskikh ekonomistov," *Izvestiya Akademii Nauk SSSR, Otdelenie Ekonomiki i Prava*, 1947, No. 3, pp. 190-200.
- (56) Ibid., p. 192.
- (57) Ibid., p. 193.
- (58) M. Smilt, "V. polskakh bezkrizisnogo kapitalizma," *Госэкономизм* 1946, No. 6, pp. 75-89.
- (59) Ibid., p. 76.
- (60) Planovoe Khozyaistvo, 1946, No. 6, p. 76.
- (61) Ibid., p. 80.
- (62) Ibid., p. 84.
- (63) I. Lemm, "Ideologiya i politika leiborizma na sluzhbe imperialisticheskoi reaktzii," *Госэкономизм* 1948, No. 6,

pp. 43-62.

- (5) Ibid., p. 47.
- (6) A. Aizenshadt, "Uchenye prisluzhniki amerikanskogo kapitala," 『土國雑誌』 1947, No. 4, pp. 80-89.
- (7) Ibid., p. 82.
- (8) Ibid., p. 85.
- (9) L. Alter, "Teoreticheskie oruzhenosty amerikansko-go imperializma," *Obzor Literatury*, 『土國雑誌』 1947, No. 5, pp. 74-94.
- (10) Ibid., p. 87.
- (11) I. G. Blyumin, "Amerikanske ekonomisty na sluzhbe monopolii," *Voprosy Ekonomiki*, 1948, No. 8, pp. 52-65.
- (12) Ibid., p. 56.
- (13) Ibid., p. 62.
- (14) J. M. Keynes, "The United States and the Keynes plan," *The New Republic*, July 29, 1940, pp. 156-159.
- (15) Blyumin, *Voprosy Ekonomiki*, 1948, No. 8, p. 65.
- (16) Blyumin, *Vestnik Moskovskogo Universiteta*, 1947, No. 4, p. 45.